

映像新聞

平成28年（2016年） 10月24日 第2261号

株式会社 映像新聞社
112－0006 東京都文京区小日向1丁目24番8号エイゾービル
電話（03）3942－2161（代表）
ファックス（03）3942－2581
毎週月曜日発行（月4回発行）
昭和42年1月25日 第3種郵便物認可
1部600円、年間購読料26,000円（税別）

Eizoshimbun 50th Anniversary 50th SINCE 1966

Visual Communications Journal

©映像新聞社

4K・8K放送ソフト事業者認定申請

BS右旋に在京キー局5社とWOWOW

帯域再編で4K 6ch実現

放送開始時期 4社が18年12月

ピュア4K番組率は6―20%

総務省は、BS等4K・8K実用放送の基幹放送事業（ソフト事業）の認定申請（受付期間9月15日―10月17日）の結果を公表した。BS右旋（17ch）の4K放送には、ビーエス朝日、BSジャパン、BS―TBS、BS日本、ビーエスフジ（50音順）の在京キー局系5社およびWOWOWが申請（WOWOWはBS左旋も申請）。キー局系5社は第一次比較審査において優先される、帯域再編を含めた「特定申請」をしていることから、BS右旋はキー局系5社とNHKの4K 6chが実施される。

帯域再編に関しては在京キー局5社の中でも意見が分かれ、ぎりぎりまで難色を示していた局もあった。しかし、帯域再編は5社そろうことが必須であったこともあり、最終的には総務省が描いたとおりの順当な申請結果となった。

WOWOWは課金情報を有していることなどから帯域再編には加わらず、特定申請はしていない。よってBS右旋についての認定審査では、在京キー局系5社から劣後することになり、結果として在京キー局系5社が認定されることになる。

開局時期は、BS朝日、ものを優遇するとされているピュア4K番組比率は、3社が20%ほど、他の2社が6、7%で申請した模様だ。

BS左旋の4K放送に申請したのは、ジュピターショップチャンネルのSCサテライト放送とQVCジャパンのQVCサテライト、東北新社、WOWOWの4者4ch。東経110度CS左旋の4K放送は、SCサテライト放送、スカパーJSATのスカパー・エンターテインメントの2者9ch（スカパーが8ch）に申請したのは、ビーエス朝日、BSジャパン、BS―TBS、BSフジがそれぞれ2018年12月、BSは19年12月で申請した模様だ。

ただし申請書は、4K8K実用放送の免許期間（5年）中のどの時点で、そのピュア4K放送比率を達成するのかを示すものにはなっていない。各社のピュア4K番組比率には達成時期に関する読み方の違いが反映していると言えそうだ。

WOWOWはBS右旋を第1、BS左旋を第2希望とし、SCサテライト放送はBS左旋を第1、110度CS左旋を第2希望としている。

WOWOWはBS右旋で認定される可能性はなく、BS左旋で認定されれば、NHKと一緒に4K・8K試験放送に参加している東北新社の認定も間違いないところ。

ショッピングチャンネルの2社も、4K・8K実用放送ソフト事業者の審査基準では、通販番組に関して、BS左旋、110度CS左旋では、放送割合の適用を除外とする特例を設けていることから、これも認定は確実である。

SCサテライト放送とQVCサテライトのピュア4K番組比率は100%。4K対応スタジオからの生放送を中心に放送を実施するためだ。

110度CSの左旋はスカパーJSATが8chで申請しているが、これはプラットフォーム事業を見据えてのものである。

〈3面に続く〉

●お知らせ 映像新聞は月4回発行のため、10月31日の発行はなく、次号は11月7日号となります。



メディアシティでは、ドローンを使った空撮を手がける空撮事業部が、大手企業のCMや、VP、ミュージックビデオなどで実績を重ねている 〈詳細2面〉

テレビ東京 BSジャパン 新本社 特集 6－10面

本号の主な記事

［放送］
スカパー！オンデマンドがリニューアル/リニアコンテンツ中心の展開に ……3
J:COMとニッポン放送が熊本で復興支援番組を生放送……12
［大型映像］
ワンダービジョン社が半球状の大型映像システムを開発……13
［ディスプレー］
インディ・アソシエイツ/空港のデジタルサイネージ事業展開 ..14

映像新聞ウェブサイト
http://www.eizoshimbun.com
購読のお申し込みはこちらから

イベント・映像機器レンタル業務に特化したレンタルシステムは、キッセイコムテックの
KAREN―CORE
詳細は以下をインターネット検索「KAREN-CORE」
http://karen-core.com
KAREN CORE

SWE DISH 緊急報道!!
SWE-DISH 小型衛星通信装置 世界シェア第1位（小型可搬部門）
■CCT120超小型衛星通信用アンテナ

■IATA対応ケースに収納可能
■車載専用バージョンもあり！
衛星通信車も設計から製造、車検登録まで一貫しておこないます。
エーティコミュニケーションズ株式会社 http://www.bizsat.jp
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-55-14
AT Communications k.k. TEL:03-5772-9125 FAX:03-5772-9126

テレビ番組「ネット同時配信」に向けて
トラフィック・シム ネット配信 ARIB字幕追加ソリューション


ネット配信用字幕インサータ
ネット配信用字幕デコーダ


■ プラグイン不要、WEBブラウザで動作。セキュリティも安心。
■ TV放送で流した字幕をそのまま配信。
■ 第二字幕に対応可能。
新しい時代を共に。
ご説明やデモなどお伺い致します。
Traffic Sim Co.,Ltd. 株式会社トラフィック・シム
〒460-0008 名古屋市中区栄1-31-41 大井ビル2F TEL：052-526-5162
E-mail：tsadv@trafficsim.co.jp URL：http://www.TrafficSim.co.jp/

メディアシティ

ドローンでの空撮事業が拡大

CMやVPでの利用が増加

メディアシティ（東京都品川区）では、ドローンを使った空撮を手掛ける空撮事業部が稼働する。製造業や飲食料業をはじめとする大手企業のCMや、VP、ミュージックビデオなどで実績を重ねている。

同社は2014年から空撮業を開始し、現在は撮影部門の1部署として活動。取締役でもある風間敏和氏が「ドローンクリエイター」として操縦を担当している。同氏は、10代のころから兄弟の影響でラジコン飛行機操縦を趣味にしており、DJIの製品が流通を始めたのを機に業務として取り組み始めた。

機材は、4K RAW撮影が可能な「DJI INSPIRE1 RAW」などを所有。大型の「DJI MATRICE 600＋Ronin－MX」も運用する。

風間氏は空撮事業について、「テレビ番組やミュージックビデオから始まり、今は企業VPやCMの依頼が多い。イベントや360度カメラを付けた撮影のほか、測量の仕事もある。今年の業務は前年の2倍程度に増えている」と好調さを説明する。

中でも、担当者を指名することの多いCM制作では、監督やカメラマンの紹介でクライアントや業務の幅が広がっているという。風間氏の操縦歴は20年にのぼり、制作やプロデューサーといったキャリアもあるため、「制作陣が求める映像のスピード感を表現できるからではないか」と自身で分析している。

今春には、海上競技のドローン撮影の可能性を探るため、東京海洋大学などと共同で電池推進船を活用した実験を実施。長さ30㍍の給電ケーブルを使い、電池推進船の電源をドローンに給電することで、数時間のフライトと撮影ができたという。

ポストプロダクション業務と連携しているのは約3割で、事前に見込んでいたのと同程度を受注できている。グループの制作会社スターランドコミュニケーションとの連携も今後増やしていく。


東京海洋大学との実験


ドローンからの映像をモニターと伝送システム（ライブU）に接続した

ポニーキャニオンなど4社

実写VR映像を公開

ネットカフェやウェブで展開

ポニーキャニオンなど4社は17日、VR（バーチャルリアリティー）ホラーショートムービーシリーズ「VR〝DEAD THEATER」をリリースした。

第1弾作品『天獄処理工場』は、国内スプラッター映画の第一人者であり、『実写版 進撃の巨人』『シン・ゴジラ』の特殊造型を担当した西村喜廣監督が手掛ける。独特の世界観とリアルな特殊造型が、視聴者の五感を恐怖で刺激する。JVCケンウッド・ビデオテックも協力している。

同シリーズでは、「ホラー映画を実体験する」をテーマに、国内の映画監督がVR作品を制作する。観客は次々に襲いかかる恐怖を360度VRで体験し、「脳と感覚を刺激する次世代型ホラーコンテンツ」（同社）を味わえる。

作品は、全国120以上のインターネットカフェで展開している視聴サービス「VR THEATER」および、VR映像ポータルサイト「VR CRUISE」（www.vr-cruise.com）において公開する。

同サイトは、ヘッドマウントディスプレイ「Gear VR」やiOS、アンドロイドアプリでも楽しめる。

ストレージはフルレンジ対応

オープン制作環境を訴求

アビッドがIBC報告

アビッド テクノロジーは10月14日、「Avid Post IBC 2016」と題したセミナーを都内で開催した。9月にアムステルダムで開催されたIBC2016の報告をはじめ、アライアンスパートナー紹介や、「プレミアプロCCユーザーがアビッド制作環境へのアクセスを可能にするメディアセントラルUXコネクター」として、アドビ社との共同実演、NHKメディアテクノロジーによる「メディアコンポーザーを活用した8Kのハイブリッド制作」の各セッションを開いた。



Premiere Pro CCからAvid Media Composerへのアクセスをデモした

IBCでは、メディア制作用共有ストレージ「Avid NEXIS」に、大規模放送局やポストプロダクション向けの「E5」が追加され、フルレンジをカバーするラインアップがそろったことを示した。NEXISの語源はネクストジェネレーションインテリジェントストレージ。オープン環境により、パートナー連携の強化を進める。

またIBCでは、従来のビデオ、オーディオに加えた第3の柱として、買収した旧オラッド社のスポーツグラフィックスシステムを掲げた。IBCでも関心事だったIP対応については「ハイブリッドSDI／IPワークフロー」を参考展示し、スポーツグラフィックスからIP化するメッセージを表したという。

スネル・アドバンスト・メディア

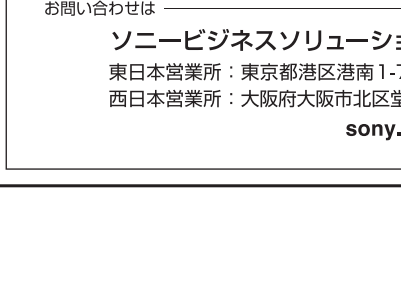
「リオ」のロードマップ披露

ユーザー交流会を開催

スネル・アドバンスト・メディアは13日、「ユーザー交流会」を開き、製品の最新状況を紹介した。

IBC2016で同社は、「クォンテルリオ」や汎用ストレージを使い、ネットワーク上でレンダリング処理を自動実行させ、運用効率を向上するシステムを提案した。方式およびフレームレート変換ソフト「アルケミストXF」によるHDR－SDR相互変換デモも実施した。

11月末にリリースされるクォンテルリオの「V4・4」では、タンジェント製のパネルや、・cube形式のLUTファイルに対応する。2017年にはタイムコード表示機能の拡充や部分レンダリング、ドルビービジョンへの対応を予定している。


クォンテルリオを実演

ユーザーディスカッションでは、音響ハウスとソニーPCL、パナソニック映像の各担当者と、本国のプロダクトマネージャーであるディモン・ホーキンス氏を交え、4K制作の状況について話をした。

同社は年内に、国内ユーザーのコミュニティーサイトを作るなどの活動を始める。

SONY
SD Card for Professional
2SF-64P
曲げやひねりに強い堅牢設計
挿抜時に繰り返し加わる負荷の影響を低減する業務用SDカード
64GB×2枚
ケース入り
曲げ強度テスト*
ひねり強度テスト*
＊：メモリーカード内部に樹脂を充填することで、当社民生用SDメモリーカードに対し、約10倍の曲げ強度、約7倍のひねり強度を実現しています。
当社の試験結果に基づくものであり、ご使用条件の環境により全てのメモリーカードのデータを保証するものではありません。また、ソニーはいかなる場合も第三者が実施する類似の試験により生じた損害について責任を負いません。
お問い合わせは
ソニービジネスソリューション株式会社　プロメディア営業部
東日本営業所：東京都港区港南1-7-1　Tel.03（6748）3033
西日本営業所：大阪府大阪市北区堂島2-4-27　Tel.06（4796）9603
sony.jp/pro-media/

InterBEE 2016
Hall8
Booth #8109
15.6" wide SH1560S
18.5" wide SH1850S
21.5" wide SH2150S
3G-SDI 入出力対応フルHD液晶パネル搭載
業務用マルチメディアディスプレイ
・高解像度、広視野角、高コントラストの超高精細フルHD液晶パネル採用
・3G-SDI入出力端子搭載
・アナログ・デジタル両信号入力対応（HDMI・DVI-D・VGA・Sビデオ・ビデオ(BNC)）
・PinP（ピクチャーインピクチャー）機能、PbyP（ピクチャーバイピクチャー）機能
・強固なメタル筐体採用と24時間連続稼働可能なタフネス設計
・壁掛け用VESA規格FPMPMI 100x100mm対応
option SHR1850
SH1850S専用 EIA19インチ7Uラックマウントブラケット
・SHR1850を使用すればEIAラックへの取付けも可能
option SH_STD
VESA 75x75mm/100x100mm 対応 スタンド
・約90°まで無段階チルト調節が可能な自立スタンドをご用意
・背面VESA穴を利用して取り付けできる便利な設計
エーディテクノ ADTECHNO
www.ad-techno.com / info@ad-techno.com
株式会社エーディテクノ
〒102-0074 東京都千代田区九段南2-3-10
TEL：03-5213-3855 / FAX：03-5213-5323

スカパーJSAT
リニアコンテンツ中心に
スカパー！オンデマンド
新アプリの提供開始
UIをパーソナライズ化

スカパーJSAT（東京都港区／以下、スカパー）は、動画配信サービス「スカパー！オンデマンド」について10月から、これまでのVODスタイルを、時間軸でコンテンツを配信するリニアサービス中心の展開にリニューアルした。コンテンツは今秋中に50chに拡大。これに伴い1日から、スカパー！オンデマンドの新アプリの提供を開始した。ロゴも一新している。同サービスは、スカパー！の放送視聴契約者が無料で利用できる一方、OTTのみの契約・視聴もできる。



新アプリは、利用者の契約情報に基づき、リアルタイム視聴が可能な番組が画像付きで表示される



利用者の契約状況を反映してパーソナライズ化された番組表

リニューアルのコンセプトは「インターネット上にスカパー！を出現させる」。視聴できるリニアチャンネルは、スターチャンネル1／2／3をはじめ、日テレジータス、フジテレビONE／TWO／NEXT、GAORA、キッズステーション、さらにボートレースのチャンネルであるJLC（全8ch）――など。

新アプリはパーソナライズを追求。加入者それぞれに選んだchに基づくパーソナライズされたユーザーインタフェースを提供する。

利用者は直感的に簡単な操作で動画視聴、ザッピング、EPGによる番組選択ができる。利用者がログインすると前回視聴していたラストのチャンネルが表示され、すぐに視聴することが可能だ。

利用者の契約情報に基づき、リアルタイム視聴が可能な番組が画像付きで表示される「Myパレット」機能があり、利用者は見たい番組をストレスなく選択・視聴できる。

番組表も特徴。利用者の契約状況を反映したパーソナライズ化された番組表になっている。チャンネルアイコンをタップするとリアルタイム視聴が可能。再生マークが付いた番組は過去の番組でも再生できる。今後、当日以降の未来の番組も視聴可能にする。

番組表では、視聴当日を境に過去・未来それぞれ15日間の番組情報を表示し、視聴できるようにする。

2012年に開始されたスカパー！オンデマンドは、16年8月31日時点の会員登録者数は103万7402件。このうち57％が放送のスカパー！契約者である。アプリのダウンロード数は111万4208。アプリについてはこれまで、提供しているチャンネルごとに個別のアプリをダウンロードしてもらう形をとっていた。

小牧氏は「これまで試行錯誤してきた結果、スカパーのOTTはリニアチャンネルの形でやっていくことに決めた」と話す。オンデマンドのOTTサービスは、棚にある多くのコンテンツからユーザーに選んでもらう形であり、これは横並びのモデルと指摘。

リニア展開でオリジナルコンテンツを制作・配信している無料インターネット放送局のAbemaTVが、既に600万を超えるダウンロード数を達成していることを例に挙げ、自社の展開について「リニアサービスの本命ととらえてもらいたい」と自信を示した。

4K・8K放送ソフト事業者認定申請
BS4K 1番組は40スロット

〈1面から続く〉

BS右旋・左旋申請各社の4K放送のスロット数はいずれも40、110度CS左旋4K放送のスロット数は60。

BS右旋に申請した各社の4K放送のスロット数が「40」と、現在の民放BS各社のスロット数（24）より多いのは、新たな圧縮方式（H・265／HEVC）によって1トラポン（中継器）で伝送できる容量が増えているため。

圧縮方式にMPEG2を使っている現在の2KのBS放送は1トラポン当たり48スロットだが、4K・8K実用放送では120スロットになる。

一方、110度CS左旋が4K 1番組60スロットなのは、同CSの変調方式がBSとは異なるためだ。

同CSは特定地域の受信状態の関係で、BSと同じ変調方式（16APSK）が使えず、8PSKを使用している。そのため4K1番組は60スロットとなり、1トラポンで4K2番組の形になる。

4K・8K放送の基幹放送普及計画では、BS右旋における4K放送は17chで2、帯域再編が実施された場合は1トラポンが増えて5ch。BS左旋については利用可能な3トラポン（8、12、14ch）の内2つを使って4K放送6ch。110度CS左旋については5トラポンを使用可能とし、4K放送10chを目標値としている。

4K・8K放送ソフト事業者の認定・免許付与は2017年1月の予定。今後、認定を前提に、在京キー局系5社をはじめとする各局は、番組制作・調達を進める一方、マスターをはじめとする4K放送用設備の構築などを進めることになる。

圧縮方式の進化で大容量化

標準化への取り組み

ケーブルラボ　HDRワークショップ②

ガンマカーブを定義

日本ケーブルラボ（以下、ラボ）のHDR（ハイダイナミックレンジ）ワークショップ（9月21日）の概要を紹介する今回は、NHK技術研究所の瀧口吉郎氏の「HDR映像フォーマット標準化への取り組み」と題した講演の要旨をまとめる。

映像をモニター上に表現するには、入力された光と出力された光を、まず光を電気信号に変換し、その電気信号を光に変えて表示する。

入力された光と出力された光は同一ではなく、従来のテレビではこの部分に一定のガンマカーブをかけている。HDRではこれらを定義し直してはいる。

HDR－TVには、現実シーン（リニア）信号をビデオ信号に変換する変換関数「OETF（Opto Electronic Transfer Function）」（カメラ側の規定）、ビデオ信号をディスプレーの光（リニア信号）に変換する変換関数「EOTF（Electro－Optical Transfer Function）」（ディスプレー側の規定）、現実シーンとディスプレーの光の間の変換関数「OOTF（Opto－Optical Transfer Function）」――をそれぞれ基準とする方式がある。

EOTFは、まずディスプレー側を規定し、その逆関数をカメラ側で定義する。一方、OETFは、カメラ側を基準に、ディスプレー側でその逆関数を定義する。

EOTFを基準とする方式がPQ（Perceptual Quantization）、OETFを基準とするのがHLG（Hybrid Log－Gamma）である。

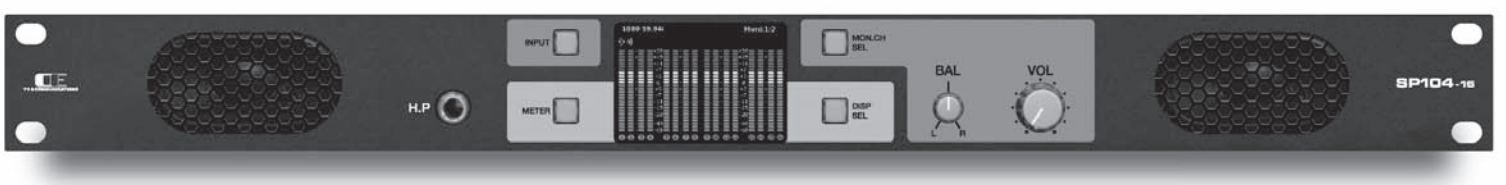
PQは表示装置上で最大1万㏅／平方㍍を絶対輝度として出力側のカーブを扱う。

人間の視覚特性に基づきビット数を効率よく使用するガンマカーブ。一方のHLGは輝度値は相対的に扱い、従来のテレビと互換性のあるガンマカーブになっている。

SDRの設定になっているモニターにHLGの信号を入力すると、その違いは切り替えれば分かるものの、HLGだけの画面を見ても気付かないレベルの特性である。

3G/HD/SD-SDI,AES　16チャンネル対応オーディオモニタ

SPシリーズ　スタンダード 16チャンネルモデル　　2016年12月　発売



SP104-16　希望小売価格　170,000円（税別）

●2.4型LCD採用，26セグメント3色バーグラフによるレベル表示の他、入力選択状況、フォーマットの状況、モニタリングの状況等を表示
●画面表示は1～8ch，9～16ch，1～16chの切換式　●入力は3G-SDI，HD-SDI，SD-SDI，AES/EBU×4ch
●出力は3G/HD/SD-SDIアクティブスルー，AES/EBUアクティブスルー，デマルチプレクス（AES×4ch），アナログ選択（600Ωバランス）
●5.1chダウンミックス モニタリング機能　●無音検知出力を装備
●16チャンネルすべてにデジタルオーディオ信号の有無を表示
●暗所でも操作し易い照光式スイッチを採用
●パワフルでクリアな音質のモニタスピーカ（4W+4W）ヘッドホン出力装備

Inter BEE 2016　各種新製品　実機展示いたします。
11.16水 ⋙ 18金 幕張メッセ　ホール3　ブースNo: 3502 にておまちしております。

株式会社 コスミックエンジニアリング　●お問い合わせは本社営業部まで　tel 042-586-2933
〒191-0065　東京都日野市旭が丘3-2-11　tel 042-586-2933（代表）　http://www.cosmic-eng.co.jp/　mail: c1000@cosmic-eng.co.jp

データで見るメディア

視聴率と秋編成㊥

NHK急上昇

2016年度上半期の視聴率競争は、民放キー局の中では日本テレビが三冠王になった。ただしG帯ではNHKが11・8%と日テレを0・2ポイント上回り、実質的には日テレは三冠王を逃している。ではNHKは今期、なぜ好調だったのか。その好調さは今後も続くのか。幾つかの視点から考えてみる。

（特別取材班）

★NHKの実績

11年度以降のNHK全日・G帯・P帯の視聴率は表のとおり。特筆すべきは、GP帯がともにここ数年減少続きだったものが、この上半期で一挙に5年前の水準に戻している点だ。NHKの編成や番組制作に大きな変化があったと考えられる。

同期間の月別G帯視聴率の推移をみると、その解が見えてくる。基本的にどの月も、過去5年右肩下がりが続いている。ただし今期の上がり方は月によって差がある。

15年度の同月比でみると、4月は2・5ポイント上がっている。5月は1・4ポイント。6月1・7ポイント。7月は0・4ポイント。8月2・6ポイントの同時多発テロや、11年9月1・3ポイントの東日本大震災がその典型例だ。ところが今期は、4月や8月以外でもNHKの夜の視聴率は好調をキープした。要因はもう少し複合的だったようだ。

2011年度以降のNHKの全日・G帯・P帯の視聴率

年度	全日	G帯	P帯
11	6.6	12.0	10.6
12	6.9	11.6	10.5
13	6.9	11.6	10.5
14	7.2	10.2	9.6
15	6.6	10.2	9.0
16	7.3	11.8	10.4

（単位は%、ビデオリサーチ調べ・関東600世帯）

重大ニュース続き波及効果

週末番組の強さやリオ五輪も要因

★背景に4つの要因

この半年のNHKの好調ぶりの背景には少なくとも4つの要因があった。

1つ目は、4月の熊本地震以外に重大ニュースがたくさんあった点だ。

熊本地震については、余震が頻発し、大雨による被害拡大も懸念され、しばらくトップニュースが続いた。

ほかにも自動車燃費不正、北朝鮮のミサイル発射や核実験、伊勢志摩サミットとオバマ大統領の広島訪問、舛添前東京都知事の政治資金流用、英国のEU離脱、そして海外でのテロやクーデター、参院選や東京都知事選、繰り返した台風の被害、東京都築地市場の豊洲移転問題など、重大ニュースのオンパレードだった。

この結果、NHKのニュースは視聴率が急上昇した。近年15%に届きにくくなっていた『ニュース7』は、この半年の平均が16%に迫った。前年同期比で1・5ポイントの上昇だ。

また前期まで平均1けたが多くなっていた『ニュースウオッチ9』も、今期は平均が11%に肉薄した。0・5ポイント改善している。NHKのG帯は、1日3時間のうち1時間45分がニュースだ。全体への波及効果はかなり大きかったのである。

★「8時またぎ」

2つ目の要因は春改編だ。15年度までは『ニュース7』後の『クロ現』で、数字を下げていた。しかし『家族に乾杯』『ガッテン』などの番組が『ニュース7』に直結したことで、事態は一変した。

民放では午後8時で番組が代わることが多い。その間のCMやミニ番組でザッピングが頻発し、視聴率を失うこともある。ところがNHKは、同一番組〝8時またぎ〟の効果で、明らかに午後7時50分台に流入者が増えた。ニュースの高い視聴率を受け、8時に視聴率をさらに高めた結果、昨年に比べ、高い番組では4%ほど視聴率を上げている。民放編成担当者の中には、「民業圧迫」と怒りを隠さない人も少なくない。

3番目の要因に、週末の強い番組がある。1つは土曜日の『ブラタモリ』だ。フジテレビの『笑っていいとも』終了でタモリに余裕が生まれ、ロケ対象を全国に広げたことで3・5ポイントほど数字が上がった。続くドラマや開始時間を早めた『サタデースポーツ』などが波及効果で視聴率を上げている。

2つ目は日曜日の『真田丸』。上期の平均が17%に迫り、前年の『花燃ゆ』を5%ほど上回った。三谷幸喜のシナリオと、個性的な役者やスタッフの頑張りが例年にない実績を生み出したと言えよう。その影響もあり、その後の『Nスペ』『サンデースポーツ』なども軒並み数字を上げている。

★民放にしわ寄せ

4つ目の要因として、8月に2週間開催されたリオ五輪の効果も大きかった。関連番組で視聴率15%超は20以上あったが、そのうち1つを除きすべてをNHKが独占した。日本人選手のメダルラッシュが大きく響いた。

高視聴率番組だけでなく、全体としても大きな実績を上げた。NHK民放ともに200時間以上の番組を放送したが、全番組の平均視聴率で2・6ポイントほどの差が出た。

民放にとっては一般番組にもしわ寄せが生じていた。NHKの五輪関連番組が強くなったために、民放番組の視聴率が下がっていたのである。例えば午前7時台のニュースは期間中16%を超え、以前と比べて3%ほど高くなった。その後の朝ドラの後の午前8時台も4%ほど上がっている。

この結果、日テレ『ZIP!』、フジ『めざましテレビ第2部』、同『とくダネ!』などが、平均で2%ほど下がった。朝帯だけでなく夜帯も、多少の差こそあれ影響が出ている。これらの状況については、民放トップが定例記者会見で苦言を呈したほどだったが、NHKとの差はそれほど無視できないものとなっている。

CALREC

小型・軽量ながら圧倒的な処理能力を搭載した
放送用ミキシングコンソール

BRIO



HIBINO
ヒビノインターサウンド株式会社
TEL:03-5783-3880　FAX:03-5783-3881
E-mail:info@hibino-intersound.co.jp　http://www.hibino-intersound.co.jp/

Beautifully Creative Technology

グレーディング / オンラインフィニッシングマシン

:SGO mistika
Ver 8.7



4K/8K 環境での圧倒的なスピードとクオリティをご体感ください。

出展します!!
ブースNo8506にて出展いたします！
Inter BEE 2016
11.16水 ≫ 18金 幕張メッセ

共信コミュニケーションズ株式会社 Kyoshincommunications
東京都品川区北品川5−9−11 大崎MTビル4F
TEL:03-3445-2070　Mail:info_mk@kycom.co.jp
kycom.co.jp

IBC2016報告⑥

配信にかかわる注目技術

ネット指向化で開発に影響
事業参入を容易にする製品群

9月にオランダ・アムステルダムで開催された「IBC2016」（主催＝英IBC）では、配信にかかわるいくつもの注目技術が披露された。特に、ネット配信を指向した技術の発展は目覚ましく、ネット配信事業への参入を容易にしている。本欄既報（9月19日号）のとおり、ネット配信を第一義に商品、サービス機能を準備する傾向が強まっている。既存の放送機器では、商品構成の伸びが期待できなくても、ネット指向化することで商品開発の余地が大きく伸びる。同時に、そこを指向した技術が新たに開発される。ネット配信が開発にも影響を与え、そこを指向した製品が生まれるという好循環が始まったようだ。

（杉沼浩司）

★とにかく試す

既報（9月19日号）のとおり、機器、サービス開発は、ネット配信に焦点を絞り一気に本格化した。今回のIBCでは、各社が「ネット配信を実現する機材、ツール、サービス」を展示フロアに持ち込んだ。

開発の背後にある思想は「とにかく試す」である。絶対成功を狙って、練りに練ったサービスを提供するのではない。拙速であっても、ごく短期間にサービスを開発し投入することが求められている。「ダメならば、撤退すればよい。成功の可能性が見いだせれば、サービスを続けながら改良する」というのが、ネットサービスの考え方だ。

これまで、ハードウエアであった各機材がクラウド上に乗り、ネットでつながることで利用できるようになった今、サービス開始は容易だ。既に、コンテンツとテンプレートが存在するものであれば、半日もあれば配信を開始できる。課金型の有料サービスでも同様だ。

このような短期間で、CDN（コンテンツ配信ネットワーク）も使え、クレジットカードによる支払も受け付けられるサービスを始められる。こうして、サービスだけは始めておき、コンテンツに対する人気（需要）を見極めて、周辺サービスを作り上げることになる。

もしも、従来ながらのハードウエア中心の考えをとったのならば、サーバー、設置場所、通信回線を確保し、そこに開発したソフトを載せ実施することになる。早くても数週間、場合によっては数カ月を要することになるが、ソフトウエアによる配信サービスが示された。素材の受け入れ、ファイル変換処理、送出、統計的計測などが一体化している。特筆すべきは、統計的計測・解析ツールが充実していることで、すべての視聴者とオンラインでつながるストリーミングの利点を最大限に活用している。

また、A／Bテスト（広告などの業界で使われる比較テスト方式）に対応したツールもあり、どのようなコンテンツ提示が最も受容されるかを短時間に計測する機能もある。



エリクソンはネット配信のソフト化・サービス化を押し出した

くてもやめられない、という状況も発生する。これに対して、クラウド・ソフトベースのサービスであれば、OPEX（運営支出）であり、増減の調整が楽になる。

極めて短期間でサービスを構築し、伸びると確信すれば積極的に資本投下する。予想が外れたと分かれば即座に撤退する。電波、ケーブルといった古典的配信は、視聴者を集める「フック（釣り針）」であり、実施したいサービスはネットで提供するとの流れが目立ってきた。

★局自体もソフトで

ここ数年、放送分野に積極的な参入を見せているエリクソンは、今回もIBC会場で大々的な展示をした。従来、スポーツシーンの可視化やUHD用コーデックなど、要素技術部分への参入が目立っていた。今回は、配信を中心としたサービス展示が主なものとなった。中でも刺激的なタイトルは「サービスとしてのTV」「サービスとしてのTV（電波を用いた既存TV放送）でも、配信業務をしていることをたものだ。これらは、電波、ケーブルを用いる放送局を代替するという意味ではなく、ネットへ向けたストリーミングの「放送局」を構築するという意味である。

ここでは、ソフトウエアによる配信サービスが示された。素材の受け入れ、ファイル変換処理、送出、統計的計測などが一体化している。特筆すべきは、統計的計測・解析ツールが充実していることで、すべての視聴者とオンラインでつながるストリーミングの利点を最大限に活用している。

また、A／Bテスト（広告などの業界で使われる比較テスト方式）に対応したツールもあり、どのようなコンテンツ提示が最も受容されるかを短時間に計測する機能もある。



NewTekはWOWZAのプラットフォームに直結するストリーム装置を発表した

同社は、携帯電話サービス用に、優れた利用者解析機能を販売しているが、このの技術がストリーミング配信にも転用された模様だ。

エリクソンは、リニアTV（電波を用いた既存TV放送）でも、配信業務をしていることをたものだ。これらは、電波、ケーブルを用いる放送局を代替するという意味ではなく、ネットへ向けたストリーミングの「放送局」を構築するという意味である。

ここでは、ソフトウエアによる配信サービスが示された。素材の受け入れ、ファイル変換処理、送出、統計的計測などが一体化している。特筆すべきは、統計的計測・解析ツールが充実していることで、すべての視聴者とオンラインでつながるストリーミングの利点を最大限に活用している。

また、A／Bテスト（広告などの業界で使われる比較テスト方式）に対応したツールもあり、どのようなコンテンツ提示が最も受容されるかを短時間に計測する機能もある。



システムベースのコーデック装置

★ストリームで組む

ストリーミング・プラットフォームの提供で数々の製品、サービスを持つWOWZA（ワウザ）メディア・システムズは、多様なハードウエアベンダーと協業している。今回、ストリーミング機材で、NewTek（ニューテック）との連携を発表した。

それによると、NewTekのストリーミング・プラットフォーム「MDS」とWOWZAのプラットフォームが連携する。MDSへの3G、HD、もしくは標準のSDIやIP入力は、ストリーミング用データにリアルタイムに変換される。MDSは、4ch入力まで可能であるが、サイズは1RUにとどまる。出力をWOWZAのクラウドサービスに流し込み、配信をする。会場に飾られたMDSのパネルには、WOWZAのロゴが刻まれていた。

MDSを使えば、大量の帯域幅を消費する非圧縮データをクラウドに上げる必要がなくなる。4chを用いても、数十Mbpsの帯域幅を用意すれば十分であり回線費用をも圧縮できる。

一方、WOWZAのクラウドもストリーミング用の処理の大半をMDSに任せるため、負荷が軽減される。MDSはSDI入力とIP入力を持つため、SDI型のワークフローをIP型ワークフローと共存させる「ハイブリッド化」も実現する。MDSは第4四半期に発売開始とされている。

★敏捷な符号化器

英システムベースは、靭性の高いオーディオ用コーデック装置「C510ip」を出展した。オーディオ信号をIP化してイーサネットに送り出し、また、逆方向の処理もできる。準瞬時圧縮として知られるADPCM方式を使用した場合2・8㍉秒のごく短い遅延が生ずるのみである。G・722、G・711といった通信系で使用される符号化方式や。L16、L24といったPCM方式も扱える。

チャンネルの管理は、PCからブラウザーを使用して実行する。2016年版のC510-ipは、VoIPなどで使われるSIPプロトコルにも対応した。

同社のテクニカル・ディレクターであるアンドリュー・スチュワード氏は「製品の特徴は敏捷性にある。電源投入後、稼働開始までは1秒だ。ネット接続の回復も10秒以内に完了する。忙しい現場の要望に応えた」と特徴を誇っていた。



ポストプロダクションにおける従来のワークフローを継承
そして更なる進化へ

D.O.T キャラクタジェネレータ

オープンプライス（ディスプレー付ターンキーシステム）

- PGM(OA)とPVW(Next)ウィンドウの同時表示により、収録中に次のテロップを作成することができます。
- Dekoと同一のショートカットと、ペイントソフトスタイルの操作性
- リアルタイム出力 (IMEで文字変換中もリアルタイムビデオ出力)
- αチャンネル付き画像ファイルを、登録せずに使用可能
- 縦ロール、横ロールのファイル(長手ファイル)をPNG等の汎用画像ファイルで書き出し可能
- エフェクトやアニメーションを連番ファイル、またはMOVファイルで書き出し可能
- GPIによる送出 (Dekoと同一のピンアサイン)

［販売］ TOTSU INTERNATIONAL 株式会社 東通インターナショナル 東京都文京区小石川1-21-14 TEL 03-5805-5271 www.totsu-int.co.jp

テレビ東京 BSジャパン 新本社が完成

設備は全面ファイルベース化

テレビ東京・BSジャパン（TX・BSJ／東京都港区）の新本社がこのほど完成した。11月7日には、これまでの東京・神谷町の局舎から実施していた放送を新本社に切り替える。新本社は、東京メトロの六本木一丁目駅と地下通路で直結した新築の高層ビル「住友不動産六本木グランドタワー」の地下1階―地上4階と10―14階を使用。マスター（番組を送信所に送り出す主調整室）をはじめ、大型の第1、第2スタジオ、報道用の第3、第4スタジオと各サブ（副調整室）、送出のみのAサブなど各放送設備を新設している。屋上にはSNGのアンテナを新設したほか専用の鉄塔も設けている。


マスターのデザインコンセプトは「宇宙空間での監視環境」

11月7日 マスター切り替え

今回の本社移転の背景には、①次期マスターは地上とBSを統合することで計画し、その更新時期が迫っていたこと②神谷町社屋で放送を維持しながら更新するのは広さ、建築、電源などのインフラ上困難であったこと③4カ所に分散したオフィスを集約することで業務効率と風通しの向上を図る――といったテーマがある。

同社では2011年11月から本社移転について具体的な検討を開始。14年に開局50周年を迎えたことで、「次の50年の飛躍に向けて礎となるオフィス作り」を目指すことにした。

新本社での大方針三本柱の1つとして「ファイル化の推進によって業務フローの効率化を実現する」を掲げ、12年から社内横断の検討体制を確立して全社的なファイル化への移行を進めた。

この大方針のもと、マスター設備をはじめとする放送システム全体のファイルベース化を推進。14年からファイルベース化を図っている報道に続き、スポーツニュース・番組設備もファイルベース化した。

ここでは、取材、回線収録した素材をサーバーに保存し、ノンリニア編集機からオンラインでアクセスして編集する形態を実現している。

1スタは大型番組に対応する広さ約200坪、天井高15㍍の旗艦設備。2スタは約100坪で4K収録対応とした。カメラ、スイッチャーは3G―SDIレベルAのビデオインタフェースを備えている。アナブースのみのAサブもカメラを4K対応にしている。

照明は、大型汎用スタジオを含めたすべてのスタジオをオールLED化した。これは国内初の取り組みである。

LEDの制御に特化したオリジナルの照明操作卓や国内メーカー初のスタジオ照明用調色LED器具、バトンの間隔を従来より広くすることでのモーター数削減、高出力LEDスポットライトと、スペースを「補完」する機能を搭載した照明バトン――などが特徴だ。

音声は1スタのカルレック「アポロ」をはじめ、すべてフルデジタルコンソールを採用している。

マスター設備は今回初めて地上とBSを統合した「統合マスターシステム」を構築。送出設備をすべて3重化している。マスター（APS＝自動番組制御システム）と送出設備は1対1で接続し、最終段で切り替える「一気通貫方式」を採用したこともポイントだ。

マスターはデザイン性も重視。「宇宙空間での監視環境の実現」をコンセプトに、VDT（ビジュアルディスプレーターミナル＝映像の切り替え器）卓を含めて曲線をイメージしたモニタウォールになっている。マスター室の後ろ側にガラス張りのビジタールームを設けたこともユニークだ。

なお、これまでの神谷町局舎については、今後もスタジオなどの主要設備を利用する。新本社の開局に伴い、電源を含めた大規模なリニューアル工事を実施。大型の第2スタジオ（150坪）も更新する計画だ。

第1スタジオサブ


マスターサイド全景

マスター

テレビ東京ではこれまで、マスター設備は地上／BS用でそれぞれ設計していたが、今回初めて地上とBSを統合した「統合マスターシステム」を構築した。


曲線をイメージしたマスターのモニターウォール

テレビ東京技術局放送技術部副部長の角健二郎氏は、「今回、極力仕様を共通化し、オペレーターに負荷がかからないよう設計した」と話す。従来設備は地上とBSが異なるメーカーであったため、仕様が把握しにくかった点を考慮したという。マスター（APS＝自動番組制御システム／DS＝データサーバー）、字幕、データ放送システムはNEC、送出設備（番組サーバー、CMバンク、VAF）は東芝を採用している。

特徴の1つは、マスター（APS／DS）および番組サーバー、CMバンク、VAF（静止画・動画・音声ファイリング）システム、字幕システムで構成する送出設備をすべて3重化した点（従来は地上・BSマスター、送出設備とも2重化）。

また、マスター（APS）と送出設備は1対1で接続し、最終段で切り替える「一気通貫方式」を採用した。従来は、送出設備から現用信号を受けており、マスター、送出設備をそれぞれ切り替えていたが、一気通貫方式によって、監視中にオンエアに障害が発生した場合、マスターの最終段のみを切り替えることで障害を回避できる。

ただ一気通貫方式では、例えばマスターA系と送出設備A系、マスターB系と送出設備B系と送出設備C系の組み合わせ時に、マスターA系と送出設備B系の同時故障が発生した場合、正常な送出系統が1系統（C系）のみになってしまう。こうした状況を避けるために導入したマスターにEMG（非常時）アラームを通知することで、現用系マスターのメインマトリックスにて、予備系統にアサインされている送出設備のXpを瞬時に自動制御。監視者の判断を待たずに障害が回避できる設計だ。

また、営放システム側L字を送出する場合は、L字ベース入力を「報道L字」に切り替えることで、CUEシート指定のL字イベントが無効になる機能も有する。

さらに今回、アナウンサーのコメント（以下、アナコメ）や番組音声素材などを収録するMAスタジオとマスターのVAFをオンラインで接続した。

従来の運用では、アナコメをSDカードに収録した後、担当者がこれをファイリング室まで持参してVAFに収録していた。今回のシステムから収録したアナコメをMAに設置したPCの特定のフォルダーに素材を置くことで、自動的にVAFに収録できる。

DSK（ダウンストリームキーヤー＝スーパーを入れる際に用いる装置）やDVE（デジタルビデオエフェクト＝特殊効果装置）、カットインなどの送出履歴を表示、出力することにより運用監視者の報告書作成を支援するアプリケーションも導入している。

送出設備では、番組サーバーは地上／BS合わせて800時間、CMバンクは同3万素材、VAFは同静止画3万枚、動画500分、音声200分を収録できる。

デザインを重視した設計である点もマスター室の特徴だ。新本社は建物と同時に設備も構築できることから、「新本社のランドマークとなるようなマスターを」との掛け声のもと数年間構想を練ってきた。

コンセプトは「宇宙空間での監視環境の実現」。デザインの目玉はモニターウォールで、VDT卓を含めて曲線をイメージした形状になっている。角氏は「かなり美しいデザインに仕上がった」と話す。また「空調音、スタンドアロンラックなど監視者周りの音にもかなり気を配り、監視に集中できる環境を構築できた」と述べた。

マスター室に隣接する部屋として、3重化に対応する検証室、データ放送室、ビジタールームを設けている。ビジタールームはマスター室の後ろ側のガラス張りの部屋で、大きな災害などが発生した際、他部署のスタッフが会議を行うほか、外部から局内見学などで一定数の来客があった際に利用する。マスター運用スタッフの待機・休憩場所にもなる。設備拡張時の利用も想定している。

地上／BS統合 送出は3重化 「一気通貫方式」採用 Xp―PCも



回線室

320×320のMTX2式

回線情報提供機能を追加

素材の出元を各サブに自動表示

回線室における回線分配設備は、320×320の大規模マトリクス（MTX）を2式導入している。設備メーカーは東芝。この2式への入力は入力段で分け、同じ信号を入力する。

マスターやスタジオサブに向けて出力する信号については局内同期させる必要があるため、フレームシンクロナイザー（FS）を導入した。

MTXの出力をいったんFSに入れ、そこからの出力をもう一度MTXに返して（リエントリ）、マスターやスタジオサブなどに分配する。

FSは3種類、計64系統導入した。メインは東芝製で、2入力1出力自動切り替え対応の機能を搭載している。これは50系統導入している。

もう1つのFSが朋栄製で、これはアップコンバート／ダウンコンバート、音声入れ替えが可能なモデル。同装置は10系統設置した。さらにもう1つが東芝製の音声入れ替え器で4系統入れている。これは、音声入れ替え、外部AES入出力を持つモデルだ。

局内同期が必要ないところに向けてはFSを経由せず、MTXへの入力信号をそのまま送っている。

回線技術の中条僚志氏は、「320×320のMTXは8入力8出力のボードを使用しているが、例えば各サブに8回線を分配する場合、1つのボードで同じサブに出力した場合、そのボードが故障すると信号がなくなってしまう。そこで各サブへの信号が1つのボードに集中しないよう、MTX入出力の配線を調整している」と説明する。

またサブに8回線を分配する際、2つのMTXからサブには4回線ずつ振り分けて送る形にしているという。1つのMTXに障害が発生した場合、半分の4回線で運用しつつ、他の系統に振り分けるなどのバッチ処理をして障害に対処するイメージだ。

今回新たに追加した機能として、回線情報提供がある。回線の名称を各サブに分配するもので、東芝が仕様作成した。

これは、まず第1名称としてMTX入力回線名称、第2名称はリエントリーした際の元のMTX入力名称。例えばFSの1番に外部からの信号をリエントリーした場合、外部の信号の名称が第2名称になる。

第3名称は任意に設定可能な名称だ。局外からの信号は、通信キャリアの固定回線でくるものと、SNG（衛星映像素材伝送システム）、FPU（無線中継伝送装置）経由でくる信号がある。

局外からの信号の第1名称にはキャリア名が付くことが多いが、これをFSでリエントリーさせると、分配先には、これがどこからきた素材なのかが分からなくなる場合がある。

そこで例えば「国会」というように、配信元の名称を設定できるようにしたのが第3名称だ。

この回線名称の情報は、各サブ、スポーツ受配信室設備などのタリー表示機の上部に設置された素材名表示機に掲出され、関係者に周知できる。

これまではモニター棚にマグネットを張るなどして、どこからきた素材なのかを見分けられるようにしていたが、これが自動化されたわけだ。

前出の北村氏は「回線を切り替えると、各名称がひも付いて追従してくるので、それがどこから来た映像なのかが、ひと目で分かる。これは特に大規模で複雑な番組での素材選択と指示の際、非常に便利な機能だと思う」と述べた。

回線分配設備から各サブ、スポーツ受配信室設備にこの情報を提供。各分配先ではこの回線名称の情報をモニター棚に表示したり、N－1（エヌマイナスワン＝生中継などでスタジオ音声のみを中継現場に送り返す回線）MTXの切り替え時に使用する。

さらに今回、回線のブッキングに関して端末上にブッキング情報を表示できるスケジュール機能も設けた。

これは、信号が入ってくる時間の何分か前に知らせてもらうなど運用担当者をアシストするものだ。


回線室

4分散のオフィス集約

部署間の壁外し横の連携強化

テレビ東京・BSジャパンの新本社の大方針の1つとなっているのが、「大部屋主義による連携と効率の強化」だ。テレビ東京・BSジャパンはこれまで神谷町で4つの場所に分散していたが、今回それを1つに集約。部署間の横の連携強化を図った。

新本社は1フロアが1000坪とかなり広いスペースを有している。すべてのオフィスで部署間をさえぎる壁を極力なくし、「風通し」を良くして部署間のコミュニケーションを活性化する。部署の変更にも柔軟に対応するという狙いもある。

業務に合わせて自発的に働く場所を選べるフリーアドレスも導入した。プロジェクトやチームで共用デスク、会議スペースを柔軟に活用できる。

13、14階に共用会議室を設置。会議室の稼働率を上げるとともにスペースの効率化を実現した。社員食堂も打ち合わせスペースとして利用できるよう工夫。1人当たりのオフィス面積の平準化も図っている。



テレビ東京・BSジャパン　スタジオ4室と送出サブを構築

全面ファイルベース化を実現

新本社のスタジオは、第1から第4までのスタジオとそれに伴う各サブ（副調整室）、および送出専用のAサブからなる。以下それぞれの設備について特徴を紹介する。

地上1階にある第1と第2スタジオは、ともに生放送から収録まで汎用的に使えるよう設計した。

1スタは広さ約200坪、天井高15㍍の旗艦設備で、選挙や歌番組といった大型番組で利用できる。カメラは8式、スイッチャーは操作パネルを2式設置した。制作技術部の北村宏一氏は、「選挙番組などで、今までは1つのパネルを共有してDVEの仕込み作業をしていたが、2つのパネルにすることにより、操作を間違えるリスクを軽減し、処理の自由度を高めたかった。また、歌番組でもトークと歌パートそれぞれに専念したいという要望があった」と話す。

1スタに隣接した2スタは約100坪で、カメラとスイッチャーは4K収録に対応する（3G―SDIレベルA）。HDRなどほ今後のバージョンアップで対応していく予定である。

1スタと2スタはソニーがシステムを担当。カメラは1スタが「HDC―2500」、2スタが「HDC―4300」。スイッチャーは「XVS―8000」。

第3スタジオは報道専用に構築し、120坪にカメラ7式とプロンプターを備える。第4スタジオは110坪でBS放送や情報番組などに使う。スイッチャーとルーターは「MuPS―4000」。

3スタと4スタは池上通信機が手がけた。カメラは3スタが「HDK―970A」「HDK―97A」、4スタは「HDK―97A」など。スイッチャーとルーターは「MuPS―4000」を4式あるいは6式を導入した。コーデックはXDCAM HD422を使う。HDCAMデッキは、基本的にXDCAM納品対応が厳しい番組用として併用していく。

Aサブはパナソニックが構築した。カメラは「AK―UC3000」、スイッチャーは「AV―HS7300」。

すべてのサブは、サブ内での撮影もできるよう美観も考慮して設計した。

各スタジオの収録は、ファイルベース化にともない、XDCAMステーション「XDS―PD2」、「XDS―PD2ore+TX」。

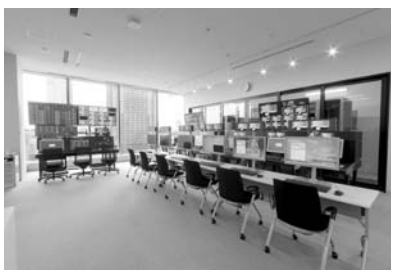
◆CGセンター

CGやテロップは「CGセンター」で統合管理する。バーチャルスタジオまで含めてここに機材を集中配備し、ルーティングスイッチャーで各サブに分配する。テロップは北海道日興通信（NIXUS）の「CG―StoreTX」。


第1スタジオのサブ


照明用の補間バトン


1スタは200坪の広さを持つ


CGセンター


照明卓

CGセンターで統合管理
オールLED照明を実現

映像技術部の太田佳彦氏は「機器の稼働率を考えた。どこのサブでも同じ機材を使え、テロッパーの台数も、従来の静止画装置や動画装置などを含め30式あったものを半分近い16式まで削減できた。タリー連動も取り入れた」と説明する。サブとの連絡にはインカムを引いている。

バーチャルスタジオ系のクライアント端末は、画像データをIPで転送して表示するゼロクライアントシステムとした。テロップ発注には電子発注システムも取り入れ、効率化や作業の正確性を向上させた。

ソフトウエアの開発は日興通信／NIXUS、ベースバンドは三友が設計した。

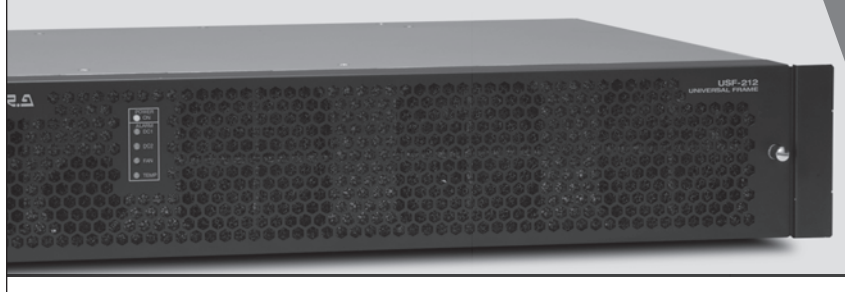
◆照明

照明は国内で初めて、大型汎用スタジオを含めたすべてのスタジオをオールLED化した。操作性や拡張性の向上とともに省電力化を実現したという。

制作技術部の水野暁夫氏は、「1スタは照明の総主幹容量が240㌔ボルアンペアと既存スタジオの約1/4から1/3程度に抑えられ、CO2排出量の削減にも貢献する」とその効果を話す。

〈9面に続く〉




Video over IP
各種 IP 規格に対応し、相互変換を実現する IP ゲートウェイ、ファイルベースとの親和性を高めたインジェストエンコーダを開発。ベースバンド、ファイルベース、IP の融合を実現します。

HDR・広色域
画像処理技術を活かし、従来の環境と新しい HDR、広色域環境を相互変換可能なプロセッサを開発。HDR 制作環境を支えます。



12G-SDI
4K/8K システムの簡素化に向け、ルーティングスイッチャ、マルチビューワ、プロセッサ、キャラクタジェネレータなど各種製品で対応していきます。12G-SDI と 3G-SDI の相互変換も提供します。

Inter BEE 2016
11.16 水 ≫ 18 金 幕張メッセ
ホール6 ブースNo. 6515

FOR-A World of Possibilities
FOR-A INNOVATIONS IN VIDEO and AUDIO TECHNOLOGY

音声卓はフルデジタル化

報道受配信室の収録は12系統

〈8面から続く〉

スタジオ内は、1スタと2スタ、3スタと4スタをイーサネットで相互接続して、システムを構築している。イーサネットをリング状に構成して、断線時にも接続を確保することができる。また隣接するスタジオとサブの入れ替えや、一方のサブから両方のスタジオを運用することも可能である。停電などの障害時の対応についてもさまざまなバックアップの冗長化を考慮している。

LEDの制御に特化したオリジナルの照明操作卓を1スタと2スタは東芝エルティーエンジニアリング、3スタと4スタはパナソニックエコソリューションズ社と共同開発。操作性と機能性、デザイン性を考慮し設計した。1スタと2スタはDMX8ポート、3スタと4スタは4ポートを同時出力する。

照明機材は、1スタと2スタはベースライト、3スタと4スタはスポットライト、ベースライトの色温度が調色可能で、国内メーカー初のスタジオ照明用調色LED器具を共同開発した。

バトンは各スタジオの形状に応じたものを設計しており、バトンの間隔を従来より広くすることでモーター数を削減し、コストを軽減している。1スタはハロゲン3キロワット相当の高出力LEDスポットライトと、スペースを「補間」する機能を搭載した照明バトンを設備し、いずれもテレビ東京ホールディングスと東芝エルティーエンジニアリングで特許を共同出願している。

◆音声

音声卓はフルデジタルコンソールを採用し、再現性と音質を向上させた。

1スタはカルレックの「アポロ」（80フェーダー）、2スタは同「アルテミス ビーム」（56フェーダー）を採用。従来のアナログコンソールでは、前段にマイクマトリックスを、後段にアウトルーティングを設置していたが、今回はデジタルの利点を生かし、コンソール内で、1スタ153ch、2スタ52chのマイク数をまかなう。マスターやレコーダーへの出力もコンソールで処理する。

制作技術部の五十嵐公彦氏は「カルレック製品は、中継支援車『S2』で『アルテミス ライト』を採用したところ、使いやすく音が良かった。今回は汎用スタジオであることから同社製品を選んだ」と話す。

バックアップ機能を充実させたのも特徴となる。緊急用のコンソールとして全サブにヤマハデジタル卓を用意。緊急時にはスイッチ1つでマスターへの出力を切り替えることができる。

五十嵐氏は「デジタルコンソールでは、特定のベイの故障やノイズといった問題が出ることがあった。DSPや電源などを二重化すると同時に、本体そのものの機能が万一故障した場合に備えている」と説明する。

モニタリングシステムはQSC社の「Q-SYS」を導入した。ルーティングからプロセシング、制御、監視までを1台で行える統合型。

3スタ4スタはタムラ製作所「NT880」、AサブはLawo「mc56」を採用した。

◆報道受配信室

報道受配信室は、国内および国外から集まる報道用素材を受信、および自社で取材した素材を他局に配信している。収録はサーバー12系統、バックアップとしてXDCAM収録（再生兼用）12系統で行っている。

ルーターは朋栄「MR-5000」（80入力×64出力）。XDCAMデッキ「PDW-HD1500」は12台を常設しており、選挙などの大型特番のために予備機を6機まで増設できる。また、各収録機には注意喚起や自動収録用のタイマーを設置している。操作卓には24型モニター6台を置き、マルチビューで入力回線やサーバー収録中の映像を監視する。

ルーターへの入力は回線室受けの素材のほか、報道受配信室に設置されたファイル伝送受信PCや、外信設備からベースバンドで出力された素材などがある。緊急時のユーティリティーとして方式変換機（シバソクVC-7）を2機設置している。

1台のPCから、ルーターおよび方式変換機、同期信号発生器（TG-8000）、マルチビューアー（MV-1620HSA）を設定でき、利便性を高めている。

◆プレゼンテーション室

番組の試写会やイベント・会見などで利用できる「プレゼンテーション室」も構えた。200インチのスクリーンに4Kプロジェクターで上映し、落ち着いた環境で試写できる。また、放送用照明と室内照明を一括制御して演出効果の高いイベントや会見ができるなど、多目的に利用可能な設備になっている。



第3スタジオのサブ



第4スタジオ



1スタの音声卓



MA2のアナブース

効率化、省スペース化を追求

スポーツ制作もファイル化

XDCAMでマスター納品

HDCAM VTRの販売が2016年3月末に終了し、サポートも23年3月末に終了する。六本木新本社への移転に伴い、既に14年からXDCAM運用をしている報道に続き、スポーツニュース・番組設備も全面的にファイルベース化した。

制作技術部の北村宏一氏は、「スポーツ制作の工程ではテープ素材を個人で管理することが多く、周囲との素材共有が難しかった。また、保管・管理にも手間やコストを要していたことから改善を図った」と話す。

新しい工程では、回線収録、カメラ取材、ファイル転送で取得した素材をサーバーに保存し、その素材をノンリニア編集機からオンラインでアクセス、編集する。そして編集した素材を、各サブに設備したXDCAMステーション「XDS-PD2000」に転送し放送する。また、サーバーの素材は一定期間経過後、LTOテープにアーカイブされる。素材の入力からアーカイブまでを低解像度ファイル、メタデータとともに、一気通貫で管理できるように構築した。

マスター納品については、テレビ東京およびBSジャパン2局への納品をXDCAMに全面的に切り替えていく。納品は放送前の臨時直しに対応するため2層までに当面限定する。

同社はこれに当たり、14年春から、本社移転までに切り替えを軌道に乗せることを目指して、グループ内のポストプロダクションを含め検証を開始。その後、14年秋から運行トライアルを開始した後、一部番組のXDCAM納品を始め、16年春にテレビ東京への主要な搬入をXDCAMに切り替えていた。

映像技術部の野崎秀人副部長は、XDCAMに切り替える主な理由を、「本社移転のタイミングで切り替えることで、運用の効率化やテープアーカイブを増やさないこと、設備の省スペース化が可能になる」と説明。見逃し配信や有料動画配信などの増加によりファイル運用への需要が高まったこともある。

XDCAMの選択は、HDCAMテープ運用との親和性や移行コスト、報道での実績、棚管理のしやすさなどによる。画質については、再エンコードが必要なスーパーの修正を20回繰り返しながら目視で確認した。

また同局は、納品制作や放送前の緊急修正に対応する本格的なポストプロダクション設備を持たない。このため、関連会社の機材をまず整備。外部の各ポストプロや番組制作者にもヒアリングを繰り返し、そのあり方を検討してきた。

運用に当たっては、外部からの納品物は目視による全編プレビューで誤植など内容の誤りがないかを、ツールを使った自動QCではフォーマットなどの技術的不具合がないか、クオリティーチェックを実施している。

今後に関しては、納品物のメタデータ運用を検証すると同時に、番組の完成度向上や検品の負荷軽減のため、制作責任者がより早い段階でプレビューできる環境を整えていく。

番宣素材は、複数の素材が1本化されたXDCAMファイルから個々を切り出しできるアプリケーションを開発し、この7月から全面的に、各局への配信をファイル伝送へ切り替えた。

制作技術部の五十嵐公



株式会社テレビ東京様
新社屋のご落成、心よりお祝い申しあげます。
御社のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

UNVEIL
NEXT
LEVEL

次のレベルへ、NIXUSが幕をあける。
操作性。効率性。そしてクオリティ。
現場の声を追求し辿り着いた、これからの放送のためのオンエアCG。

CG-Store 新シリーズ
CG-NEXTA
次世代テロップシステム、誕生。

InterBEEにて初公開！全てのワークフローを会場で。
InterBEE 2016 | NIXUS BOOTH：ホール6 6507

NIXUS www.nixus.jp
北海道日興通信株式会社 011-251-4251 media@hnikko.co.jp
日興通信株式会社 メディア事業部 03-5451-1751 nixus@nikkotelecom.co.jp

テレビ東京

スポーツ制作の支援ツールに

テレビ東京は、六本木3丁目の新本社にNewTekのリプレイ・スローモーションシステム「3Play 440」を導入。11月のカットオーバー（システム移行）に向け設置作業を続けている。スポーツ中継は2020年の東京五輪を筆頭に、今後ますます放送の質と量の拡大が見込まれており、それに伴う放送局内でのワークフローも向上する必要がある。3Play 440導入により、現場の作業がどう変わるのか取材した。

NewTek 3Play 440採用

早いレスポンスと適切な価格

さまざまな展開も計画

同局では現在、ゴルフや テニス、サッカーなど多様なスポーツ中継を放送している。

「追っかけ送出室」は、これらの競技が終了した後に録画放送する番組を制作している。中継現場から送られる映像を局内で収録しながら、放送時間に合うように尺を計算して編集し、競技の臨場感を保ちながら番組の形を整えていくのが主な業務だ。

3Play 440はこの作業のなかで、中継現場のアナウンサーのコメント終わりや、そのカット変わりのタイミングの映像・音声を確認する、いわば「制作支援ツール」として使われる。

映像技術部の北村嘉邦氏は、「これまでにテープ編集や複数のノンリニアシステムを利用してきたが、本社移転計画があったため、次の機材を探していた」と話す。


北村氏

機材選定のポイントは「SD画質でも良いからレスポンスの良い機材」だったという。この業務では、尺を計算しながら本編をしっかりと編集することはもちろん、数時間後に迫った放送時間に備えて迅速に作業する必要があることから、目的のタイムコード点に素早く飛んで再生することが必要になる。このためにはキビキビと反応してくれる機材が求められるのだという。

さらに、この作業は映像作成の工程の「一部」であることから、それに応じたコスト感であることも必要となる。

「高額な編集チェーンを増やすことなく、コストを抑えながら作業できる機材が望ましかった。また、従来は現地から1系統の伝送が多かったが、最近は競技映像に加え、現地スタジオや注目選手を追う別系統の映像が同時に伝送されてくることもある。これまで1入力の機材を2式用意することもあったが、コスト面は有効ではない。今回導入した3Play 440はライブボタンやコントローラーが付くうえ、4入力で400万円台の価格。今後、多チャンネル化に向かうことを考えると、3playを入れる利点は大きい」（北村氏）。

収録時間が4chで計150時間という長時間対応なのも重要だった。スポーツでは朝から夕方までなど長時間伝送されることが多く、複数のファイルに分かれては作業がしにくいのだ。


3play 440



3play本体

同局では現在、11月に向けて最終調整作業を進めて予定だ」と明かす。

その一例が、他製品にはないというCGワイプや音声ミックス機能である。

「現地から映像とスーパー入りの映像をともに取り込み、映像をやりくりしながら3Playの機能を足せば、CGワイプしてハイライトに移るなど、より完パケに近い形まで制作することができる」（同氏）という。

本番映像の収録バックアップに使うことも計画している。「送出サブに対して本線を送出するとともに、まったく別制御となる3Playを使えば、本線に何かがあってもバックアップできる」（同氏）。ウェブ配信用のハイライト映像作成業務で、ファイル変換の機能を使うことも可能だ。

北村氏は「もちろん、タイムコードを表示した映像の出力や、音声チャンネルの入れ替えができればといった要望もある。3Playでできることと、できないことをうまく使い分ければ、費用を抑えながら良い番組を作ることに貢献できるのではないか」と話している。



ヒビノインターサウンド

会議用マイクや放送用音声卓
Inter BEE 2016で披露

ヒビノインターサウンドはInter BEE 2016で、連携するシュア・ジャパンブースで、会議システム向けマイクロホン「マイクロフレックスアドバンス」を実演する。独自の収音コントロール技術を使用した製品で、ラインアップは3種類。



「マイクロフレックスアドバンス」シリーズ

「MXA910」は、頭上から発言者の口元を狙って収音する天井設置型シーリングアレイマイクロホンで、出力は収音エリア個別の8系統と、自動ミキシングチャンネルを加えた9系統。信号はDanteで送れる。

「MXA310」はテーブルに置いて任意の範囲を収音する。収音方向を15度刻みで設定できる。無指向性、双指向性などに加え、本体上部のみ収音を抑えることで、プロジェクターなどから生じるノイズを抑える「トロイドパターン」もある。

ネットワークインターフェース「ANI4IN／OUT」は1／3ラックサイズで、手軽にDanteネットワークを構築できる。

カルレック製の放送用ミキシングコンソール「BRIO（ブリオ）」も披露する。

国内で10月1日に発売した中小規模向け小型製品で、中継でも利用できる。機能は上位製品と同様で、最大プロセッシング数すべてを同時に処理できる「Blufin2 DSP」を搭載する。8系統のGPIとGPOを装備し、電源は冗長化されている。

価格はオープンだが、従来よりも抑えた金額を実現。カルレック製品は英BBCや国内キー局が導入しているが、低価格帯の発表により、地方局も採用しやすくなる。

ローランドが発表
簡単操作のステレオアンプ
スイッチャーは一体型

ローランドはInter BEE 2016に、新製品のミキシングステレオアンプ「SRA-5050A」を出展する。シンプルなGUIで操作が簡単。マイク1系統とライン2系統の入力をミックスできる。

また、3G-SDIとHDMI対応のフルHD 1080pビデオスイッチャー「V-1SDI」はハーフA4サイズ。コントロールパネルと一体型で場所を選ばないプロ向けの新製品。マルチビューワーやDSK、PinPを搭載し、全14chのオーディオミキサーを内蔵する。RS-232やUSB-MIDIで外部制御できる。

既に発表されている製品からは、ライブミキシングコンソール「O・H・R・C・A」や、マルチフォーマットビデオスイッチャー「V-1200HD」などを展示する。

ハイエンドの「XD3シリーズ」は、4K／60p、HDR10、HDMI2・0aをサポートする4Kビデオエンジンを搭載する。フルHD・HTML5サイネージに適したスタンダードモデルや、多彩な基本機能で、シンプルなサイネージをローコストで導入可能できるエントリーモデルもある。

Inter BEE2016にも出展する。

ジャパンマテリアル

H・265で高画質化
サイネージ用再生機

ジャパンマテリアルは11月上旬、米ブライトサイン社開発のデジタルサイネージプレーヤー「ブライトサイン」の新シリーズ4種類を発売する。

新シリーズはH・265デコーディング機能により高画質化した。モバイルデバイスをサイネージに連動したり、最大1000台のプレーヤーを一度に設定したりする機能を搭載。モザイクモード機能は、1つのディスプレーで独立した複数のビデオを同期再生する。

最上位の「XTシリーズ」は、シリーズ史上最速の4Kビデオエンジン・HTML／グラフィックスエンジンを搭載する。

フルHD・HTML5

VGI

ファイルベース製品を
4つのブースで展示

ビジュアル・グラフィックス（VGI）は、Inter BEE 2016で、4つのブースでソリューション別に出展する。明栄ブースでは、4K HDR対応VFX制作向けの「オートデスクフレーム」と、エディトシェアのストレージ「エクストリームEFS」、リモート編集システムを展示する。

アマゾンウェブサービスジャパンのブースでは、ハイブリッドクラウドストレージ「ストラトゲートウェイ」を紹介。アビッドブースでは、大型スクリーンに対応するリアルタイムグラフィックス製品を、メラノックスのブースでは、独自の「ワイヤードサーバー」10Gビット版を参考出展する。

共信コミュニケーションズ

Mistikaで8Kデモ

共信コミュニケーションズは「HD／4K／8K編集ワークフロー」「インジェスト&アーカイブ」「16 5型超狭ピッチ4KLEDディスプレイ」「4K撮影―高速転送」「オリジナルソリューション」の5分野でInter BEE 2016に出展する。

「SGO Mistika」は、「VRフィニッシング」「HDRグレーディング」を実演するほか、「8Kモニターアウトでのポストプロダクション」を初披露する。

大型映像向けのシリコンコア製「PO・95mmウルトラファインピッチLEDパネル」は、1 65型の超狭ピッチ4K LEDディスプレー。





J:COM／ニッポン放送

熊本で復興支援の番組

2社連携して現地から生放送

ジュピターテレコム（J：COM）とニッポン放送は、熊本地震から半年が経過した22日、ニッポン放送の『八木亜希子LOVE&MELODY』（毎週土曜）と、J：COMの『週刊シティプロモーションご当地サタデー♪』（J：COMテレビ、毎週土曜／以下「ご当地サタデー」）で、統一テーマ「今、行こう！これからも…熊本！」を掲げ、熊本市からラジオとテレビを通じて熊本を応援する番組を生放送した。

J：COMとニッポン放送は、ともに毎週土曜日、フリーアナウンサーでタレントの八木亜希子が担当している番組を生放送していることから、両社が連携して被災地を支援できることについて話し合いを重ね、今回、2つの番組で熊本から生放送する企画が実現したという。

ニッポン放送では、当日午前8時30分にJ：COM熊本（熊本市中央区）のスタジオから生放送を開始。午前10時―10時30分にはJ：COMと同時生放送で、熊本をテーマにコーナーを進行し、リスナーに向けメッセージを発信、大西一史・熊本市長も出演した。またニッポン放送とJ：COMの2社合同のプレゼント企画も実施した。

『ご当地サタデー』では午後2時より、復旧工事が続く熊本城のふもとにある観光施設「桜の馬場城彩苑」から、ラジオ放送に引き続き、大西市長をゲストに公開生放送を開始。番組では、震災の爪あとが残る中、復興に立ち向かう熊本市の〝人〟に注目。熊本市在住で、自らも熊本地震を体験したタレントのスザンヌが現地からリポートした。熊本にゆかりのある著名人からのビデオメッセージも交えながら、さまざまなゲストを通じて熊本の魅力を伝えた。

グループ局にジェイコム熊本があるJ：COMは、震災直後から被災地域の住民に向けて、災害およびライフライン情報を継続的に放送してきた。

一方、ニッポン放送は「安心・安全報道、救命報道」を災害報道の基本姿勢とし、ラジオというメディアの社会的使命に基づき、人々に防災に対する意識を喚起している。

熊本地震では、発生当時から義援金をリスナーから募り、熊本県に届けるなどの支援をしている。

J：COMとニッポン放送は、今後もテレビ放送、ラジオを通じて、熊本市の復興を継続的に支援していくとしている。

安全・安心パトロール隊を発足

J：COM東京北

ジェイコム東京北（J：COM東京北／東京都北区）は、地域の安全・安心と犯罪抑止に貢献するため、「J：COM東京北安全・安心パトロール隊」を発足した。

J：COM東京北では、日常業務においてスタッフが事件・事故の目撃、不審者との遭遇や不審物を発見した際、直ちに警察に通報するなど地域の防犯活動に協力する。営業車両15台、自転車18台に「パトロール」ステッカーを掲示して巡回し、防犯意識の向上と犯罪発生の抑止を図る。

CATVエキスパート資格講習・試験を実施

技術協会が全国8都市で

日本CATV技術協会（東京都新宿区／以下、技術協会）は、2017年CATVエキスパート資格講習・試験を実施する。CATVエキスパート資格は、技術協会が実施するCATV技術者資格の1つ。従来の有線テレビジョン放送技術者資格制度を、デジタル化時代に対応した資格として発展改称し6年目となる。

この資格は、放送のデジタル化、IP・ブロードバンド技術や放送法で定める安全・信頼性の習得、放送法に基づく有線一般放送の登録申請にあたっての技術的能力の確認、建造物障害予測調査の受注要件、そのほかCATV関係で広く認められている。

併せてCATVエキスパート、第1級CATV技術者、総合監理技術者の資格更新も実施する。

試験は、4つの専門科目および法規からなり、1つ以上の専門科目と法規科目に合格するとエキスパート資格が得られる。第2級CATV技術資格の有資格者は、法規科目免除で専門科目に合格するとエキスパート資格の取得ができ、また第1級CATV技術資格の有資格者は、ブロードバンド科目に合格すると最上位資格のCATV総合監理技術者になることができる。

【2017年エキスパート資格の講習・試験日程】

▽申し込み期間＝11月1―18日▽講習＝17年1月10―27日（札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、高松、福岡で順次開催）▽試験＝17年2月12日（全国8都市で実施）

【申し込み・詳細】www.catv.or.jp

【問い合わせ】資格制度専門☎03―5155―6282（平日午前9時30分―午後5時）

自動運転AI向け学習ツール

CG技術を用いて開発

バーテックスが発表会

CG技術を用いて自動運転用AI（人工知能）および検証支援ツールを開発したバーテックス（本社＝東京都港区）は7日、発表会を開催した。同社は、アドバンスド・データ・コントロールズ（ADaC）とwiseが合同で5月に設立した。

自動運転技術では、AI技術による車両、歩行車などの解析が極めて重要とされている。解析のためには、AIに状況を「教える」必要があるが、一般にこの画像データは実走により取得されている。



取締役CFOの河原隆氏



代表取締役CEOの尾小山良哉氏

AIの誤解析を修正するために再度教育する場合などは、誤解析を引き起こした部分のデータのみを更新して学習させることが望ましい。しかし、実車走行により得た画像から、必要な条件を変更するのは不可能に近い。

バーテックスはCGで道路、車両、歩行者などの画像を生成し、これを解析用AIに供給するテストベンチを開発した。また、CGであることを生かして、環境条件（日中、夜間、晴天、曇天、雨天、霧、順光、逆光など）を自由に操作することで、解析用AIによる学習の効率が大幅に向上するとしている。

CG生成には、ゲームエンジンとして知られている「Unreal Engine4」を使用してレンダリングしている。実写とCG画像の合致度合いは、PSNRとSSIMの2つの指標により判定したという。



CGを画像解析ソフトに掛け、実写同様に解析されることを示した

同社は、自動車メーカーおよび部品納入事業者の両者を顧客と想定し、顧客の試験項目に応じたシミュレーションのオーダーメイド環境構築から事業を開始するとしている。環境をパッケージ化した販売も視野に入れている。



半球状の大型映像システム

WANDER VISION TECHNO LABOLATORY（ワンダービジョンテクノラボラトリー、東京都大田区／以下、ワンダービジョン社）は、半球状の大スクリーンに映像を投写することで、これまでにない映像体験ができるシステム「WV Sphere（ワンダービジョン スフィア）5・2」を開発。11月16―18日に開催される「Inter BEE 2016」の同社ブースで国内初披露する。



（右から）田村氏、中平氏とスタッフの小林正明氏

この新大型映像の企画開発を手掛けたのは、アートディレクターで東京工科大学デザイン学部講師の田村吾郎氏だ。田村氏は、指揮者・西本智実氏によるサントリーホールでのクラシック音楽公演でプロジェクションマッピングを演出するなど、斬新な映像アーチストとして幅広い分野で活躍している。

田村氏は「今回の大型映像は、何年も前から企画の話があり準備を進めていたものだが、今回開発の条件が整い、プロトタイプが今秋完成した。ワンダービジョン社のオフィスで仮組みし、主に業界関係者からの評価を受けている段階である。Inter BEEに出展後、よりよい形で商品化を目指す」と話している。

ワンダービジョン社シニアマネージャーの中平誠氏は「この製品の企画開発と総合プロデュースは田村氏が担当しているが、製品自体は当社から発売の予定だ。同様な製品はこれまでにもあったが、圧倒的なクオリティーの高さと小型軽量化を実現したことが大きな特長である。設置に時間がかからないので、移動型としてイベント会場などに持ち込んでの利用も想定している」と話す。

「WV Sphere 5・2」は幅5・2㍍、高さ3・4㍍、奥行き2・6㍍の半球状スクリーンに、4Kや8Kなどの高精細映像を映し出すことが可能。映像に合わせイスを動かしたり、風を吹かせたり、さらにサウンド効果を加えることもできる。これらの効果が五感を刺激することで特別な映像体験をもたらすという。



新大型映像システム「WV Sphere 5.2」

デモ機では、クリスティ・デジタル・システムズ製で4K対応3万㍋を実現した超高輝度プロジェクター「ボクサー4K30」を1台利用する。

田村氏は「ボクサー4K30を利用することで、高解像度と高輝度を両立することができた。ボクサー以外のプロジェクターの利用も可能で、多くのプロジェクターメーカーが関心を寄せている。高精細映像コンテンツを制作する企業やVR（バーチャルリアリティー）関連企業、アミューズメント業界なども注目している。多くの企業からの意見も取り入れながら、よりよい製品を開発していく」と意気込みを示す。

記者が実際に試作機を体験してみると、メガネなしでもVRのように空を飛んでいるかのような感覚を味わうことができた。

「例えば高齢者向けに海外旅行の擬似体験や、ハンディキャップのある人などが、やりたくてもできなかったことを擬似体験できる。このように社会的意義や価値の高い活用方法も考えていきたい」と田村氏は語っている。

ワンダービジョンテクノラボラトリーが開発

メガネなしでVRのような体験

Inter BEE 2016で初披露へ

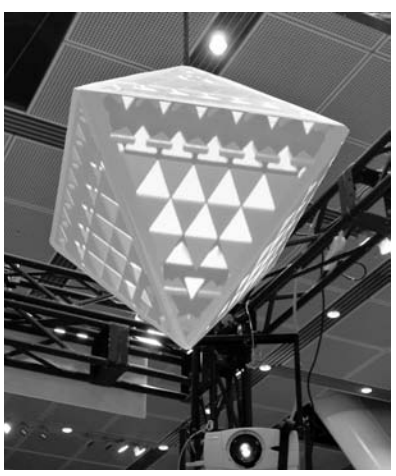
東京信用保証協会主催フェア

「動くマッピング」出展

コローレ 6面体オブジェに投映

中小企業・小規模事業者の事業拡大・発展に貢献するため、東京信用保証協会主催の10回目となるビジネスフェア「江戸・TOKYO 技とテクノの融合展2016」が12日に東京都千代田区の東京国際フォーラムで開催されたが、コローレ（東京都中野区）は、動くプロジェクションマッピング（マッピング）を出展し話題を集めた。

コローレ取締役でプロジェクションマッピング事業部長の浦島啓氏は「三洋電機製の液晶プロジェクター『LP－XP57』（輝度＝5500㍋）を4台使って、上下左右から6面体のオブジェに映像を投映した」と話す。



「動くプロジェクションマッピング」

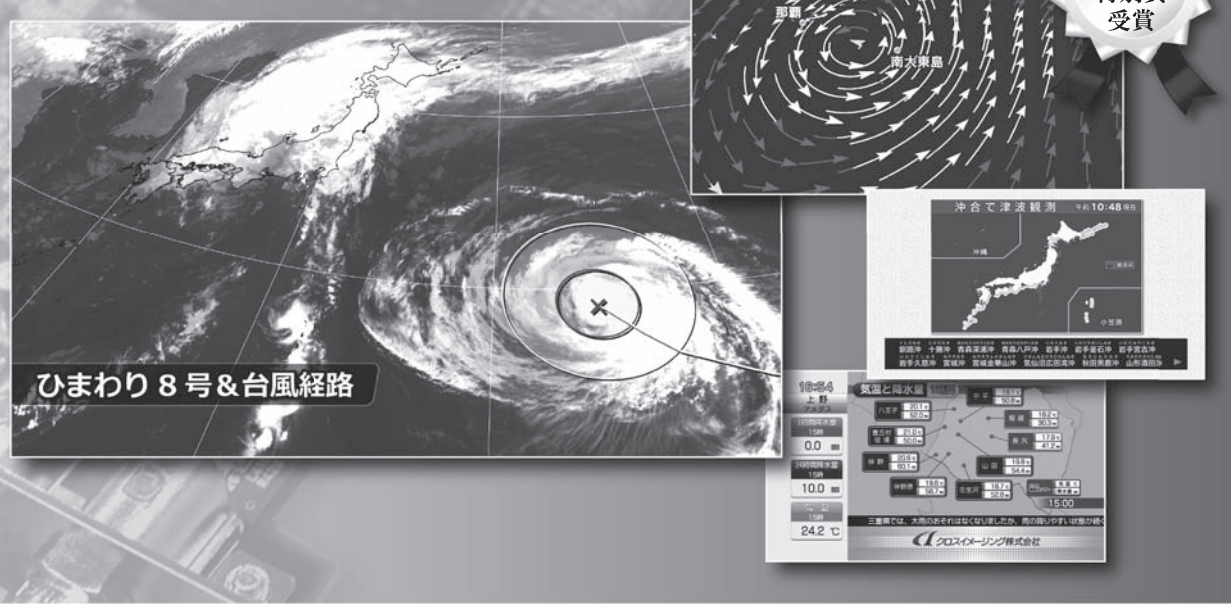
マッピングのコンテンツ制作をした、映像作家の吉川マッハスペシャル氏は「今回の出展にあたって試行錯誤を重ねた結果、マッピングが動いたら面白いと考え、企画制作をした。展示会の性格上、マッピングを初めて見るという人もいて、十分に楽しんでもらえたと思う」と述べた。

浦島氏は「イベントなどでのレンタルのほか、アミューズメント関連やショールームなどでの需要に期待している」と語った。

Cross Imaging

緊急地震速報、防災情報、気象情報の
リーディング・システム・インテグレーター

HDSDI ボード、ドライバ、
アプリケーションソフトウェア等、
すべて自社で、研究・開発・製造を
おこなっております。
高速且つ安定した稼働を実現した
画期的なシステムです。



Inter BEE 2016
11.16 水 ≫ 18 金 幕張メッセ

幕張メッセ（千葉市美浜区）にて開催されます Inter BEE 2016
（映像制作／放送関連機材部門／ホール5／5214）に今年も
出展することになりました。 ご来場をお待ちしております。

クロスイメージング株式会社　〒141-0031 東京都品川区西五反田 1-5-1 A-PLACE 五反田駅前 9F
TEL. 03-6417-9190(代表)　FAX. 03-6417-9195　http://crossimaging.jp/

空港のデジタルサイネージ事業展開

羽田10カ所にタッチパネル式

インディ・アソシエイツ

インディ・アソシエイツ（本社＝名古屋市中区以下、インディ）は、空港のデジタルサイネージ事業に力を入れている。今年春には、東京都大田区の羽田空港の国内線旅客ターミナルにおいて、保安エリア内の合計10カ所（第1ターミナル6台、第2ターミナル4台）に60型タッチパネル方式のサイネージを設置した。

36面大型マルチも

60型液晶タッチパネルディスプレーは、シャープ製「ビッグパット」を採用し、大画面で見やすい環境を実現した。

営業企画部デジタルサイネージプロデューサーの山崎剛氏は「羽田空港の国内線の保安エリアでは、手荷物検査を終わって正面の場所にタッチパネルサイネージを設置し、正式な運用を開始した」と説明する。


山崎氏


大地氏

営業企画部プランニング・ディレクターの大地祐氏は「60型の大型ディスプレーで、マップ表示とショップや施設の案内などを表示している。4カ国語（日・英・韓・中）に対応し多くの外国からの旅行客も訪れる空港でのインバウンドの需要にも応えている」と加えた。

なおサイネージ用のソフトウエアは、米スカラ社のシステムをベースにインディで自社開発の機能を付加した。

インディでは、このサイネージの筐体制作からサイネージシステム構築、コンテンツ制作、運用保守まで、トータルソリューションを自社で担っているという。

山崎氏は「羽田空港には14年3月、国際線旅客ターミナル拡張部に36面マルチ液晶ディスプレー（シャープ製）を設置した。画面解像度は16Kウルトラワイドビュー（1万6320×2304ピクセル）の表示を実現。就航都市の世界遺産の紹介映像や、カメラセンサーを利用したインタラクティブコンテンツを表示する。特殊な解像度にクオリティーの高い映像表示をするため、オリジナルのソフトウエアを自社開発して利用している。さらに羽田空港内にインディ羽田分室を設け、国際線・国内線ともにきめ細かい対応をしている点も羽田空港運営会社から高い評価を受けている。これらの実績が評価され今回の国内線での導入に至った」と話す。

そして「今後も空港に最適な映像ソリューションを研究開発し、国内外で提案していく」と、さらなる意欲を示している。


羽田空港国内線保安エリア内の60型タッチパネルサイネージ


国際線旅客ターミナル拡張部の36面マルチ液晶ディスプレー

東京・日本橋「コレド室町」

自動ドアサイネージ設置

国内で初　PDCが運用

東京・日本橋の商業施設「コレド室町」の1階と地下1階の入り口自動ドアには、日本初の「自動ドアサイネージ」（旭硝子製）が設置され、話題となっている。

運営するピーディーシー（PDC）の菅原淳之社長は「当社ではガラス面に液晶を直接貼合（そんごう）できるガラスサイネージの商材を取り扱っている。ガラスサイネージは、反射によるギラツキを抑えて高コントラストでクリアな映像が表示できる」と話す。

コレド室町では、自動扉の戸袋スペースを活用したサイネージを導入しており、菅原社長は「新時代のデジタルサイネージ」と期待を示す。

ガラスサイネージディスプレーには、旭硝子が開発した「infoverre（インフォベール）」を利用。直接貼合により①反射面が減り、従来のデジタルサイネージに比べ視認性が大幅に向上②ディスプレー設置のための架台が不要で、狭いスペースで設置が可能――などの特長がある。

また、常温・常圧で接着できる特殊樹脂が、現場での施工を可能にした。そのため、新築だけではなく、既設のガラスにも設置することができる。ガラスを傷つけずに、ガラスからディスプレーをはがすことも可能だ。

イオンモール岡山店（岡山県）や東急東横線ホームなどに導入事例があるが、菅原社長は「自動ドアサイネージなど、これまでは考えられなかった場所での活用も可能で、サイネージの利用場面が拡大する」と期待を寄せている。


コレド室町の入り口自動ドアに設置された日本初の「自動ドアサイネージ」

CLMシリーズ
8kg/平米の超軽量屋外用
透過型LEDシステム
（国内導入多数）
6mm/10mm/15mm
新たに6mmピッチ・ブラック
SMD搭載モデルを追加、
ステージ用LEDスクリーンの標準機。
NEW!!

CLIシリーズ
17.2kg/平米で2.6mmピッチからの
屋内用高精細LEDシステム
（テレビ・イベントで実績多数）
2.6mm/3.9mm/5.2mm
全機種ブラックSMDと
MicroGridマスク搭載、
屋内用LEDスクリーンの標準機。
NEW!!

CLFシリーズ
4t/平米の耐荷重屋外対応
LEDフロアシステム
（スポーツ・イベントで実績多数）
5mm/6mm/10mm
全モデルSMD搭載、
カーボンフレーム採用
LEDフロアシステム。
NEW!!

Glux

uLV/NVHシリーズ
デジタルサイネージの標準
（国内導入多数）
3.9mm/6mm/8mm/10mm/16mm
全機種高輝度屋外用SMD搭載、
信号/電源自動復帰回路、
日本製電源ユニット搭載。

LEDは0.9mmピッチから、
4K液晶モニタ、透過型有機ELまで、
フルラインナップ。
LEYARD™

TWA/TWS
4K/8K LEDディスプレイシステム
0.9mm/1.2mm/1.4mm/1.9mm/2.5mm
4K/8K対応
マルチ液晶モニタ同様に
システムアップが可能な、
54/27インチサイズ。
NEW!!

PLANAR
A LEYARD Company

DirectLight 2
超薄型・フロントメンテ構造の
超高精細LEDディスプレイ
0.9mm/1.2mm/1.5mm/1.8mm
設置場所を選ばず、
完全フロントメンテナンス構造、
27インチサイズ。
NEW!!

LO55シリーズ
透過型有機ELディスプレイ
（テレビ、イベント、常設で販売実績多数）
55型透過型有機ELディスプレイ。
【国内販売総代理店及びレンタル】
tv asahi service
株式会社 テレビ朝日サービス
TEL：03-5786-7315
Email：planar@tv-asahi-service.co.jp

URシリーズ
超強化ガラス大型4K液晶タッチディスプレイ
（テレビ、イベント、常設で販売実績多数）
ゴリラガラスをグラスボンディングした
強化表面に、タッチパネルを内蔵。
3D信号にも対応する大型液晶モニター。

LO55のご用命は指定代理店であるテレビ朝日サービス様へお願い致します。商品の仕様は予告なく変更することがあります。デモ機各種取りそろえておりますので、ご用命下さい。ショールームでご覧頂ける機種もございますのでお問い合わせ下さい。随時、販売代理店を募集しております。

LEYARD™
レイヤードジャパン株式会社
LEDディスプレイ売上世界1位
【移転しました】
新オフィス　〒171-0021 東京都豊島区西池袋5-17-12 創業新幹線ビル6F
カスタマーサービス・ロジスティック　〒171-0014 東京都豊島区池袋2-24-8 安楽ビル1F
HP　http://leyard.jp
FB　https://www.facebook.com/leyardJP
Email　salesjp@leyard.com

新時代の大型映像ビジネス 101

熊本復興と街頭ビジョン

今年4月に発生した「熊本地震」から半年が過ぎた。熊本市内には主な街頭大型ビジョンが3基あり、そのほかにデジタルサイネージなどの大型液晶ディスプレーも多数稼働し、徐々に復興の兆しをみせている。しかし、被害の大きかった益城町や大津町、阿蘇市などの郊外の地域では、瓦礫（がれき）の片付けもままならない。被害の大きかった熊本城も近寄ることはできず、さらに風評被害によって観光客は激減しているという。このような現状であるが、実はこの熊本は1995年のフルカラーLED大型映像の黎明期に、いち早くフルカラーLED方式の街頭大型ビジョンビジネスが始まった街でもある。

（川田宏之）

1990年代に活躍した業界の先駆者
望まれる東京五輪による支援

黎明期にフルカラーLED導入

1993年に日亜化学工業が1カンデラという超高輝度の青色LEDを開発。この青色LEDを使用したフルカラーLED大型街頭ビジョンが市場に登場したのは、1994年12月である。当時はメディア技術、近鉄技術研究所、赤見電機、東芝などの企業から、フルカラーLED大型映像システムが街頭に設置され、にわかにフルカラーLED大型映像の市場は活性化した。

大阪・難波、東京・渋谷、そして熱海（静岡）、名古屋、福岡などに加え、熊本市内にも1995年にフルカラーLEDを利用した街頭大型ビジョンが登場した。熊本の大型ビジョンの名称は「SABO365」で、東芝製フルカラー大型ビジョン『365歩のマーチ』から取ったと当時の「SABO365」大型ビジョン運営会社の山村社長は語っていた。1995年夏、筆者はその「SABO365」の第1号機であった。



熊本市内には液晶4面マルチビジョンを利用したサイネージも新設されていた

東芝といえば、中央競馬の京都競馬場、プロ野球ヤクルトスワローズのフランチャイズの神宮球場、街頭大型ビジョンで繁華街や駅前に設置されているケースが多く、繁華街を中心に「SABO365」を探してみたが、いっこうに見当たらない。住所を頼りに、行き着いたところは繁華街からは少し外れた幹線道路沿いのエリアだった。

主に自動車ドライバーに向けて各種の情報をアピールする「ロードサイドビジョン」は、今でこそ東京の首都高速道路エリア沿いに10基以上が設置されているが、当時「ロードサイドビジョン」という概念は、少なくとも日本市場では皆無であった。

その後「SABO365」は、熊本市内の繁華街に2号機を設置。大阪で先行開業していたメディア技術（その後倒産）の南海難波駅前の大型ビジョン「なにわものがたり」を買収して事業を拡大していった。

このころ山村社長を取材したときに語った「これまで多くのビジネスを手掛けてきたが、1万円の利益を上げるためにこんなに苦労させられるビジネスは、大型ビジョン事業をおいてほかにはない」という言葉は強く印象に残っている。山村社長の情熱だけが「SABO365」の大型ビジョンビジネスを支えていたといっても過言ではなかろう。


東京五輪イベント「シティドレッシング」では巨大な3面大型LEDディスプレーを利用した

同氏は志半ばにして病に倒れ、50代の若さで亡くなった。2000年前後のことと記憶している。筆者は、当時の業界紙に「フルカラーLEDによる街頭大型ビジョンの先駆者として頑張っていた熊本の快男児の功績をけっして忘れることはないだろう」と記した。

「SABO365」は、山村氏亡き後も「シャワービジョン」と名称を改めて、しばらく事業を継続していたが、その後熊本市内から姿を消した。

今回、久しぶりに「SABO365」があったと思われる場所に足を運んでみたが、大型ビジョンの姿はもちろんなく、ただ車が多く行き交う道路だけの風景がそこにはあった。

●五輪関連で需要拡大

このような先駆者によって発展してきた街頭大型ビジョンやデジタルサイネージのビジネスであるが、2020年の東京五輪へ向けては新たな展開も垣間見られる。

今年9月20日―10月10日に、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と、東京2020ゴールドパートナー（不動産開発カテゴリー）である三井不動産は、東京・日本橋の街全体に大規模な装飾を施す「シティドレッシング」を実施した。

東京2020スポンサー9社の協力を得て実施したこのイベントでは、巨大な3面大型LEDディスプレーを利用した映像コンテンツの上映が話題を呼んだ。

仲通りの連絡通路およびコレド室町1・2の壁面に軽量LEDパネルを敷き詰め、コの字型の体感シアターを設置。この大型映像では、今夏のリオ大会の映像を映し出し、臨場感溢れる雰囲気と感動を再現していた。『そして、いよいよ東京にオリンピック・パラリンピックがやってくる』をテーマにした映像コンテンツも上映した。

大型映像システムの運営はイベント会社のエルテックで、大型LEDディスプレーはレイヤードジャパンの製品が利用された。

●望まれる復興支援

私事ではあるが、熊本県大津町在住の友人も被災して自宅が全壊、9月に住宅の取り壊しが終わったばかりで、いまだに不自由な暮らしを強いられている。筆者は、その復興支援の思いもあって今年4月以降、熊本に何回か足を運んだ。

東京五輪は復興五輪とも称され、東日本大震災の被災地の宮城県で一部競技を実施するという案も浮上している。被害の規模は比べものにならないのかもしれないが、大地震の被災地である熊本にも、東京五輪関連で何か目を向けてもらいたいと思うのは私だけではあるまい。

SONY

4K/60P
4K映像素材は、ソニー製CineAlta 4Kカメラ「F65」で撮影。イベントなど大画面にも対応可能。

HDR
PQ·HLG
PQ·HLG·その他HDRに対応可能。

UHD BD
HDR映像をUltra HD Blu-ray™でも提供。



高画質には理由がある。
ソニー高画質ビデオライブラリー
Sony PCL　www.lib.sonypcl.jp　ソニーPCL 高画質
企画·制作＞撮影＞ポスプロ＞上映サポートまで、ソニーPCLの4Kワンストップソリューション。
※"Blu-ray Disc™"、"Blu-ray™"、"Blu-ray 3D™"、"Ultra HD Blu-ray™"は、Blu-ray Disc Associationの商標です。
※SONYおよびその他の名称は、ソニー株式会社の商標または登録商標です。
※記載されている名称等は、一般に各社の商標または登録商標です。

新機能追加
EXA INTERNATIONAL
HDリニア画像補正システム
Archangel Ph.C-HD導入
古いテープメディア、フィルム素材をリアルタイムで補正処理することにより、時間とコストを掛けずに高品質にデジタルリマスタリング致します。
新機能　リアルタイム補正しながら、高品質のアップ・ダウンコンバートが可能になりました。



株式会社エクサインターナショナル　〒107-0052　東京都港区赤坂2丁目16番9号
TEL：03-5575-3911　FAX：03-5575-3910

映像プロダクション年鑑2016
THE AUDIOVISUAL PRODUCTION YEARBOOK 2016

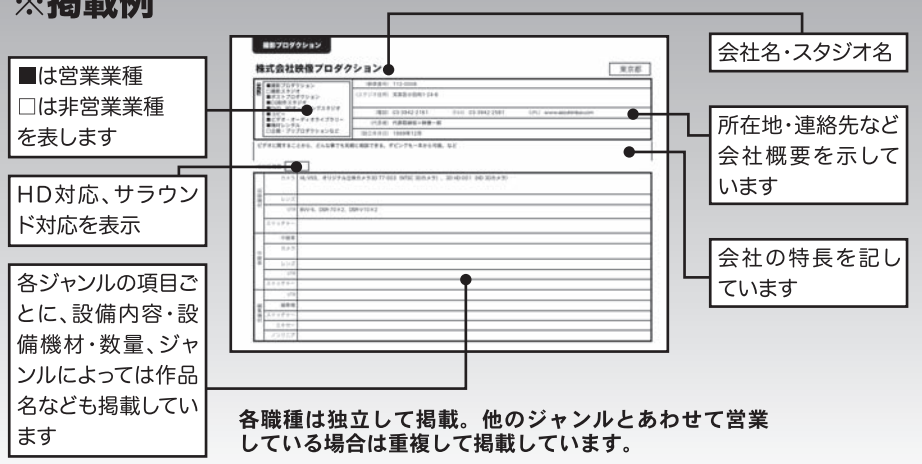
掲載プロダクション全国578社の企業概要・設備全貌を掲載

好評発売中



本書は、全国の技術系映像プロダクションについて、業種別（撮影プロダクション、撮影スタジオ、ポストプロダクション、CG制作スタジオ、DVDオーサリングスタジオ、ビデオ・オーディオライブラリー、機材レンタル、企画・プリプロダクション）に、会社概要および設備内容、巻末にはオンライン編集室、MA室の一覧を掲載しております。

※掲載例



各職種は独立して掲載。他のジャンルとあわせて営業している場合は重複して掲載しています。

ご購入は映像新聞ウェブサイトからお申し込み頂けます
http://www.eizoshimbun.com
アマゾン（www.amazon.co.jp）、富士山マガジンサービス（www.fujisan.co.jp）からもご購入いただけます
●A4判　●594ページ　●価格／￥5,800＋税（送料別）

ご注文　ご住所、貴社名、所属部署、ご担当者氏名、連絡先をご記入の上、FAXでお送りください。請求書は商品と一緒に郵送いたします。

映像プロダクション年鑑2016申込書
FAX：03-3942-2581

お申し込み日　　年　　月　　日

会 社 名

所属・役職　　氏　　名

電　　話　　ファクス

郵便番号　　住　　所

数　　量　　部　　金　　額　　円

●お問い合わせ●
株式会社映像新聞社　東京都文京区小日向1-24-8　エイゾービル　TEL：03-3942-2161　FAX：03-3942-2581　メールアドレス：info@eizoshimbun.com　URL：www.eizoshimbun.com

「手紙は憶えている」

アトム・エゴヤン監督が描くサスペンス

意表をつく発想にただ感嘆

見ている方が「一本取られた」と思わず唸（うな）るサスペンス・スリラーが、アトム・エゴヤン監督の新作『手紙は憶えている』（カナダ・ドイツ製作）だ。最近、これほどのひねりの効いたドンデン返しは見たことがない。見事としか言いようがないサスペンスの意表をつく発想に、ただ感嘆するのみだ。

（中川洋吉・映画評論家）

アトム・エゴヤン監督はカナダ出身であり、彼の描く光景は荒涼とした雪原が多く、いかにも雪に閉ざされたカナダの雰囲気が見る者を印象付ける。近作『デビルズノット』（２０１４年）、『白い沈黙』（15年）を見れば、同監督の心象風景としての白い世界がよく分かる。初期の『エキゾチカ』（１９９４年／カンヌ国際映画祭監督週間出品）では、不条理な状況が設定され、その特異性をもってカナダ人監督として注目された。

彼の代表作は『アララトの聖母』（２００２年）であろう。アルメニア移民2世である彼は、自身の出自であるアルメニアにおける、トルコによる大虐殺事件を描く『アララトの聖母』を世に問い、自身のアイデンティティーを強く押し出した。

オスマントルコによるアルメニア人大虐殺は19世紀末と20世紀初頭の2度にわたり、死者は推定１００万から１５０万人といわれる。この一件で、欧州諸国はオスマン帝国の継承国であるトルコを現在でも非難し続けている。トルコのEU不加盟は、トルコが望むにもかかわらず、EU諸国の反発が一因とされている。もちろんトルコは一貫して謝罪を拒否している。



「手紙は憶えている」（ゼヴ㊧とマックス）
©2014, Remember Productions Inc.

◆一老人に渡された手紙

物語は1通の手紙から始まる。舞台は米国、多くのナチ残党がドイツ敗戦後に米国に渡る事実を基にしている。

ある地方都市の高齢者ケア施設が最初の舞台。ケア施設と言っても、富裕層対象らしく、各人が大きな個人部屋を持つ豪華なつくり。

１人の老人、ゼヴが夢うつつで、眠い目をこすりながら亡妻の名を呼ぶ。

彼は1週間前に妻を亡くしたばかりだが、既に軽い認知症を患い、過去と現在が判然としない。家政婦に言われ、彼はやっと正気を取り戻す。

ゼヴは本作『手紙は憶えている』の主人公で、当年90歳のアウシュヴィッツ強制収容所の数少ない生き残り組。作品を通しての鍵は、彼のマダラボケ症状を思わず認知症である。この彼に朝食後、同じケア施設で暮らす老人、マックスが近づき手紙を渡す。この手紙が作中、大きな役割を果す。

物語の先導役の手紙のアイデアを作り出したのが、37歳と若い脚本家ベンジャミン・オーガストで、この作品が1作目である。このオーガストの類いまれな発想が、見る者をぐいぐい引き付ける。もちろん、脚本を最初に目にしたエゴヤン監督もプロデューサーも、この脚本に目が釘付けになったのは言うまでもない。

◆マックス

70年前にナチスに家族を殺されたのはマックスも同様で、多少、認知症気味のゼヴの症状を利用する。マックスいわく「君が1週間前に話したアウシュヴィッツのこと、多分よく思い出せないと思い、言ったことを手紙にしたためておいた」と話を持ち掛ける。

実際、ゼヴはナチスに対する憎しみは忘れぬが、ある瞬間、その悲劇が記憶の中から抜け落ちるときがある。マックスによれば、家族を殺したナチスの兵士は、現在も身分を偽り米国で生き延びているとのこと。犯人の名は「ルディ・コランダー」であり、彼は刑死した捕虜の身分を盗み、生存したことが分かっている。

◆「サイモン・ヴィーゼンタール・センター」

すべての情報は「サイモン・ヴィーゼンタール・センター」からのものである。同センターはロサンゼルスに本部を置く非政府組織で、ナチ・ハンターの威名をとる。有名なアイヒマン裁判の仕掛けも、同センターの手によるものだ。

老人の旧ナチ戦犯への復讐劇

１人目のルディ（ブルーノ・ガンツ）
©2014, Remember Productions Inc.

０歳近くの老戦犯も容赦なく捕えられる。

◆４人の「ルディ」を探して

ゼヴの旅行は、すべてマックスが手配し、費用も彼持ちである。

敗戦後、ナチス戦犯たちの多くは南米に潜伏したが、１９６１年にイスラエルの諜報機関「モサド」（１９４９年創設）がアルゼンチン潜伏中のアイヒマン元ナチス親衛隊中佐を拉致し、イスラエルの法廷に立たせた。

アイヒマン自身は、ヨーロッパのユダヤ人を駆駅には運転手が出迎え、ホテルは前払い、そして行先はマックスの指示により、ゼヴの復讐劇が始まる。

４人の旧ナチ戦犯「ルディ・コランダー」探しを始める。この中の１人がゼヴやマックスの家族を殺している。第１の「ルディ」を探し当てる。会決議により、ナチスによる殺人罪への時効が中止された法的根拠に基づいている。従って、１０

88歳の老人（ブルーノ・ガンツ／日本でも知名度を誇る数少ないドイツ人俳優、『ベルリン・天使の詩』〈１９８７年〉、『ヒトラー最後の2日間』〈２００５年〉などが代表作）はドイツ人であること、ナチスの兵士であることを素直に認めるが、アウシュヴィッツの虐殺は頑として認めない。

１人目の「ルディ」と対決する前に、ゼヴはマックスからの電話指示で、ピストルを購入する用意書いてもらう。ゼヴは認知症発症の合間を行きつ戻りつしている。

ピストルを突き付けられた第1の「ルディ」は、戦争中ロンメル将軍の指揮するアフリカ戦線での従軍の事実を語る。彼は人違いであった。

次いで第2の「ルディ」をマックスの指示により探し出す。訪ねるケア施設で、第2の「ルディ」がベッドに横たわる。彼はほとんど死に体で息も絶え絶え、哀れさえ催す。

チスが目の敵にして収容所へ送り込んだ同性愛者であった。この第2の「ルディ」も空振りとなる。

続いて、片田舎の一軒家を訪ねる。そこは留守で家の中のどう猛な犬の鳴き声がうるさい。郵便配達夫が玄関に置く小包のあて名は「コランダー」であり、ゼヴはようやく真犯人にたどり着いたとばかり、長い時間、玄関先で家人の帰りを待つ。

夕方、１人の警官が帰宅。疲れ果てた90歳の老人ゼヴを招き入れ、水を飲ます。生気を取り戻したゼヴは、男が第3の「ルディ」の息子であることを知る。息子はドイツ好きであった父の思い出を話し出す。多くの遺品や軍服、そして壁にはナチスのカギ十字の旗。

第3の「ルディ」は、ほぼ本物と特定しかかった時、息子はゼヴの腕の刺青を発見。好意的だった彼の態度が一変し、凶暴なシェパードを放つ。彼は反ユダヤ主義者で、ゼヴに殺意を持つ。ゼヴはとっさに、ピストルで犬と息子を射殺する。危機一髪であった。

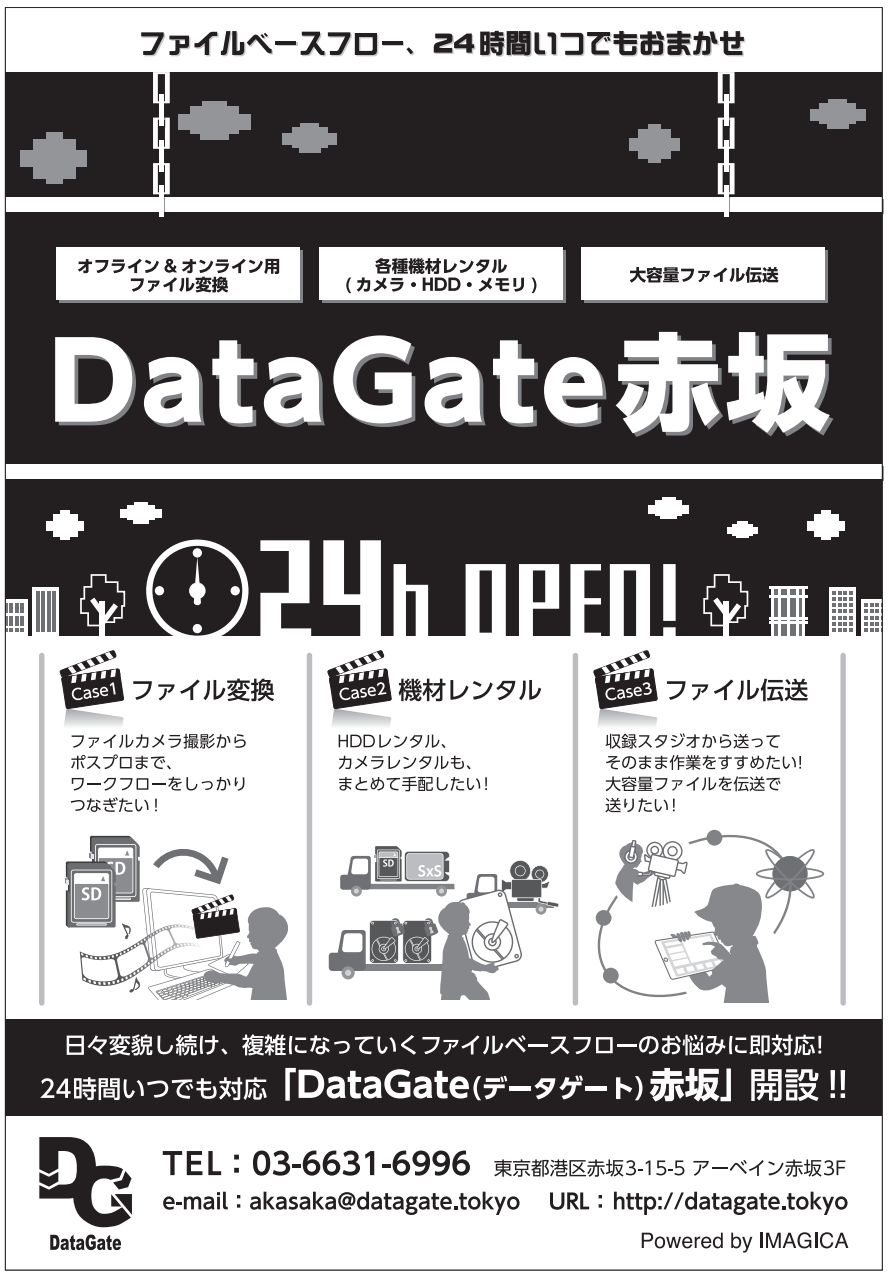
◆第４の「ルディ」と結末

またしてもマックスから指示が来る。今度は真犯人だ。訪ねる老人は90歳くらい、彼はゼヴに親愛の情を示し、互いの刺青を見せ合う。突如、ゼヴの認知症の霧が晴れ、いまわしい過去が蘇る。ここで信じられないような大ドンデンが起る。脚本家オーガストの渾身のアイデアである。

エゴヤン監督は、歴史的事実が与える影響で、心ならずも運命を変えざるをえない状況を想定している。本作では、それが復讐という形となるが、彼は超法規的措置でこの復讐はやむを得ないものとしている。危険な発想だが、認めざるを得ない。

〈文中敬称略〉

▣『手紙は憶えている』は10月28日から、ＴＯＨＯシネマズシャンテほかで全国ロードショー



「情報」がビジネスを熱くする。

映像新聞は、放送やブロードバンド、デジタルコンテンツプロダクション、映像制作者など映像業界へ向け、ビジネスとテクノロジーの両視点で情報を発信している専門紙です。映像のデジタル化は、デジタル放送やデジタルシネマといった新しい文化を創り、ブロードバンドにより新しいコミュニケーションを発達させました。映像新聞は、これらの動きをいち早く伝え、新鮮な情報をお届けいたします。
ビジネスを熱くするメディア……それが「映像新聞」です。

映像新聞

毎週月曜日、月4回発行（年間48回発行）
基本ページ数
20〜24ページ／タブロイド判
年間購読料：26,000円（送料込み）＋消費税
海外での購読の場合は、消費税分を除いた料金に別途送料がかかります。　詳しくはお問い合わせ下さい。

短期購読および複数購読のご案内

●短期購読の場合
◎3カ月購読の場合：7,200円（1部600円×12回）＋消費税
◎6カ月購読の場合：14,400円（1部×24回＋消費税）

●複数購読の場合（年間購読契約のみ）
対象となる購読者（以下の3つの条件をすべてを満たすこと）
◎送付先が同一であること
◎請求先が同一であること（送付先とは別でも可）
◎購読契約期間（契約更新月）が同一であること

※料金（申し込み部数により料金を割引きます）
・2–5部は**10%**割引き　（1部、年間23,400円＋消費税）
・6–9部は**20%**割引き　（1部、年間20,800円＋消費税）
・10部以上は**30%**割引き（1部、年間18,200円＋消費税）

ご注意　ご住所、貴社名、所属部門、ご担当者氏名、連絡先をご記入の上、FAXでお送りください。請求書を発行いたします。

☑を入れてＦＡＸ 03-3942-2581 までどうぞ　　年　月　日

□	映像新聞年間購読	月号から　部
□	映像新聞短期購読	3・6　ヶ月　部
□	映像新聞見本紙	1部

送付先

貴　社　名
所属・役職　　氏　　名
住　　所　〒（　　－　　）
電　　話　（　　）　　－　　ＦＡＸ（　　）　　－
Ｅ－mail

請求先（送付先と異なる場合）

住　　所　〒（　　－　　）
電　　話　（　　）　　－　　担　当　者

ウェブサイトからもお申し込みができます　**http://www.eizoshimbun.com**

●ご購読のお申込み・お問い合わせはこちらへ。
映像新聞社 〒112-0006　東京都文京区小日向1-24-8エイゾービル TEL 03-3942-2161　FAX 03-3942-2581　e-mail:info@eizoshimbun.com

映画プロデューサー養成

VIPO 基礎編セミナーを開催

映像産業振興機構（VIPO）は、若手映画プロデューサーまたは映画プロデューサー志望者を対象に、11月11日から全4回（毎週金曜日）の日程で開催する「映画プロデューサー養成セミナー基礎編」の参加者を募集している。

今年度で11年目を迎える文化庁委託事業「ndjc：若手作家育成プロジェクト」の運営を通じ、映画監督の育成に取り組むなか、5月には俳優養成の集中講座「アクターズワークショップ」を開催し、24人が参加した。

今回は、映画製作の総責任者として重要な役割を担う「プロデューサー」に注目。早稲田大学名誉教授の安藤紘平氏を講師に迎え、第1―3回は、企画の立て方・書き方、プロットの書き方、脚本の仕組みと構成理解、予算の立て方などについて、メジャー系映画、インデペンデント系映画それぞれの視点でレクチャーする。

最終回（第4回）は、映画『トイレのピエタ』で第20回新藤兼人賞銀賞、第56回日本映画監督協会新人賞など数々の賞に輝いた松永大司監督（ndjc2010年度卒業生）を迎え、同作品の企画から製作過程の話を交えて講義する。

【日時】11月11、18、25日、12月2日（毎週金曜日）／各回18時30分―21時30分

【会場】VIPO（東京都中央区築地4―1―1東劇ビル2階）

【参加費】一般4万円（全4回分）

【定員】30人（事前申込制・先着順）

【申し込み締め切り】10月31日

【申し込み・詳細】www.vipo.or.jp

11月8日にセミナー
テレビの活路を展望
次世代メディア研究所

次世代メディア研究所は、11月8日に特別セミナー「〝今そこにある危機〟への対応」を開く。

テレビのリアルタイム視聴の減少が続いている。大きな原因は、タイムシフト視聴やスマートデバイスの利用が増えている点。これらに対応すべく、新たな取り組みが始まっている。

業界では、ビデオリサーチの「録画再生視聴率調査」をはじめ、電通総研が「スマホの利用実態調査」、インテージが「シングルソースパネル調査」、そして日本テレビが「メディア・ラボ」を設置している。こうした動きから、テレビ局の対応としてどんな施策が可能なのか、次のテレビの活路を展望する。

講師は、ビデオリサーチ テレビ調査部長 橋本和彦氏、電通／電通総研 メディアイノベーション ラボ統括責任者 奥律哉氏、インテージ／クロスメディア情報開発部長 田中宏昌氏。日本テレビ 編成局メディア・ラボ シニアクリエイター 土屋敏男氏、モデレーターは、次世代メディア研究所 鈴木祐司代表が務める。

【日時】11月8日／16―19時

【会場】インテージ秋葉原ビル・セミナールーム（東京都千代田区神田練塀町3番地）

【受講料】一般2万円（法人会員契約企業は契約人数まで無料）

【申し込み】jisedai-media.main.jp/home/reception

ITVA-日本

企業映像のコンテストで
ウェブ投票プロジェクト
クラウドファンディング活用

ITVA―日本は、第22回企業映像コンテスト「ITVA―日本 CONTEST 2016」の開催にあたり企画した「ウェブ投票プロジェクト」を、Makuakeのプラットフォームによるクラウドファンディングで展開している。

企業映像は、映画や放送番組とは異なり、限られたターゲットに絞り込んだコンセプトをぶつけ、効果を期待する内容になっている。コンテストでは内製作品や外注作品など、さまざまな形態の作品が集まる。審査の中心は、映像技術よりも企画に重きを置いている。

これまでも特定の審査員に加え、来場者による会場審査を反映させてきたが、さらに広く企業映像を認知してもらうことを目的に、今回はウェブを通じての一般審査を実施。そのために必要な投票システムを構築するプロジェクトとなっている。支援者には、有意義なリターンを用意する。

◆募集期間＝2017年1月23日まで▽クラウドファンディング支援期間＝12月23日まで▽ウェブ審査期間＝17年2月3―28日

【詳細】www.itva-jp.com

27-30日開催
DCEXPO2016 セミナーイベント 事前予約を受付中

10月27―30日に東京・青海の日本科学未来館で開催される「デジタルコンテンツEXPO2016」では、シンポジウム・セミナーの事前予約受け付けをしている。主な内容は次のとおり。

▽8K：VRシアター「Aoi～碧～サカナクション」（随時／7階イノベーションホール）▽70型超の大画面での8K3D映像、22・2ch立体音響、レーザー照明演出を組み合わせた、世界初の8K：VR作品の上映（無料・予約制）。

詳細＝www.dcexpo.jp/1408191

▽講演・パネルディスカッション「インタラクティブの未来像」（28日／15時15分―16時45分、1階センターステージ／無料）詳細＝www.dcexpo.jp/16071

▽ASIAGRAPH2016匠（たくみ）賞授賞式／匠賞記念トーク「コミュニケーションを創るアート、つなぐデザイン」&ASIAGRAPH2016創（つむぎ）賞授賞式（29日／14時15分―15時50分、1階センターステージ／無料）詳細＝www.dcexpo.jp/16574

▽アニメーションマスタークラス2016：実践に学ぶVRコンテンツ制作（30日／10時30分―16時30分、7階会議室2／有料）詳細＝www.dcexpo.jp/14934

▽SIGGRAPH 2016 Computer Animation Festival入賞作品上映（28日／13時―14時45分、7階未来館ホール／無料）詳細＝www.dcexpo.jp/16068／同（30日／16時5分―17時、1階センターステージ／無料）詳細＝www.dcexpo.jp/16574

社名変更

◇クォンテル（10月1日付）

社名を「スネル・アドバンスト・メディア株式会社」として正式に変更した。住所（東京都港区南青山6―5―55）および代表電話番号（03―3400―5711）に変更はない。





SONY



4Kに新たな感動を。

臨場感とリアリティーに満ちた心揺さぶる4K映像をお届けしたい。
ソニーは映画、番組制作からライブ中継まで、さまざまな映像領域に向けたHDR対応機器をラインアップ。
4Kの美しさを最大限に引き出し、4K+HDRという映像美の新たな時代を切り開きます。



4K+HDRの時代はソニーから。

4K

・CineAlta Premium 4Kカメラ **F65RS** ・CineAlta 4Kカメラ **PMW-F55** ・マルチフォーマットポータブルカメラ **HDC-4300**
・55型 業務用4K有機ELモニター **PVM-X550** NEW ・30型 4K有機ELマスターモニター **BVM-X300**
・マルチフォーマットスイッチャープロセッサー **XVS-8000** NEW ・マルチポートAVストレージユニット **PWS-4500** ・4Kメモリープレーヤー **PMW-PZ1**

ソニーのプロフェッショナル/業務用映像制作機材の情報は sony.jp/pro-cc/
広告掲載商品に関するお問い合わせは 業務用商品相談窓口［フリーダイヤル］携帯電話・PHS・一部のIP電話からは050-3754-9550/受付時間:9～18時（土・日・祝日・弊社休業日は除く） 0120-788-333

◎ソニーおよびSONYは、ソニー株式会社の登録商標です。CineAltaは、ソニー株式会社の商標です。 ◎その他記載されている商品名は、各社の商標または登録商標です。本文中ではTM、®マークは明記していません。◎商品を安全に使うため使用前に必ず「取扱説明書」をよくお読みください。◎掲載商品の仕様や外観は改良のため予告なく変更することがあります。

Sony Business Solutions Corporation
ソニービジネスソリューション株式会社